

## 解題

## 丹丘詩話

## 三卷

芥

煥

著

芥芥川自ら修して芥とす。煥字は彦章、丹丘と號す。又た養軒と號す。京師の人。宇野鼎に學べり。蕃薇館集詩家本草等の著あり。

此書は、詩法譜詩體品詩評斷の三門に分ち古今諸家の詩に關する説話を抄し、之に自家の論斷を加へたり。又詩體品には、唐人の同題の詩を並べ記して、その句法篇法に就いて批判を下せり。寛延辛未正月、平安書肆唐本屋吉左衛門刻。

## 丹丘詩話序

葛天八閔遐哉邈乎摻尾叩角聲音安寄吟詠性情與鳥迹俱矣蓋感物吟志辭達而已方是時也上無所述下亡所做林籟結響泉石激韻婉轉附物直而不野亦天地自然文爾夫卿雲南風聖情所發厥美固宜康衢擊壤一何渾雅詩者天地元聲誠非虛論雖然運數互移情變應之三代之溫厚漢魏之高華六朝之麗縟三唐之整秀咸臻厥美此蓋元聲之秀發也夫天地之大莫不有焉腐宋胡元亦氣運之偏至皆不外於元聲也明監于百代郁郁得中剪革所創二代爲之忠臣宋致工於作所以垂也明用工於述所以與唐竝盛也夫述有教有物有則唐來才英其論備矣而志尙如面義亦偏至此彥章斯篇所以作也乃仍前脩之論覈白岐路歸諸當行如其善學于麟者不肖于麟卽于麟能不爲獻吉者廼能爲獻吉者惟彼論爾

此乃教之微獨教之亦足以砭夫佻他以爲己力探囊揭篋不以爲恥者也余不甚好詩而吾眼中有詩不敢不任識詩故和彥章之論以題其首云爾

延享乙丑夏六月

西播

岡白駒

撰

城廣文書

詩話小引

夫唐體新興，聲律始宏，明製繼啓，制作大備，譬猶少康中興，克配上帝，周公踐祚，全作禮樂焉。若夫商推前藻，垂範後昆，則自非著絕世之識，蘊曠古之材者，惡能辨白泗沘，剖析朱紫哉！以吾觀之，儀卿禎卿，首闢衆妙之門，元美、元瑞，繼演大雅之風，精義透金石，高趣薄雲天，尙何所加擬議哉！顧余結髮業詩，從事有年，仰誦俯思，有得輒書，積書爲卷，以資蒙士，雖不足取高前式，庶亦無差品隲云爾。

寬保癸亥五月

平安 芥煥 彥章 撰

# 丹丘詩話卷上

平安 芥煥 彦章 著

關元常子恆 校

## 詩法譜

(一)

### 性靈

徐禎卿曰、因情以發氣、因氣以成聲、因聲而繪詞、因詞而定韻、此詩之源也、夫情者非性靈所發乎、袁中郎曰、人心自有唐鍾伯敬曰、真詩者古人精神所爲也、與吾所表出、有何差別、毫釐千里、正在阿堵間矣、吾邦物茂卿先生曰、袁鍾

丹丘詩話卷上

## 詩法譜

(一)

### 性靈

徐禎卿曰、情に因て以て氣を發し、氣に因て以て聲を成し、聲に因て而して詞を繪き、詞に因て而して韻を定む、此れ詩の源なり、夫れ情は性靈の發する所に非ずや、袁中郎曰、人心自ら唐有りき、鍾伯敬曰、真詩は古人精神の爲す所なり、吾が表出する所も、何の差別有ん、毫釐千里、正に阿堵の間に在りき、吾が邦、物茂卿先生曰、袁鍾一子、口を極めて主李を疵毀す、今其什を披くに、袁は宋、鍾は元、絶えて他調無し、其の

二子、極口詆毀王李、今披其什、袁宋鍾元、絕無他調、其借口唐者、唯爲點計、以吾言之、無乃以人廢言乎、假使李于麟、王元美輩言之、則先生奉戴以爲律令、猶指諸掌爾、知者不言、言者不知、學者當默識。

## 〔二〕

## 二聲

平 仄

皇甫子循曰、詩苟音律欠諧、終非妙境、故無取拗體、此最正論、聲律嚴密、莫如濟南焉、其選唐詩、序曰、七言律諸家所難、子美篇什雖多、慣焉自放矣、蓋譏其多拗體也、北地學少陵多變律、初學不

唐に借口する者は、唯、點計を爲すのみ、吾を以て之を言ふに、乃ち人を以て言を廢する無からんか、假使李于麟、王元美が輩之を言はば、則先生は奉戴して以て律令を爲さん、猶ほ諾を掌に指すがごときのみ、知る者は言はず、言ふ者は知らず、學者當に默識すべし。

## 〔二〕

## 二聲

平 仄

皇甫子循曰、詩苟し、音律、諧を欠かば、終に妙境に非ず、故に拗體を取るごし無し、此れ最正論なり、聲律の嚴密なるは、濟南に如くは莫し、其の唐詩を選する序に曰、七言律は諸家の難しとする所、子美が篇什多し、雖、慣焉として自放せり、蓋其の拗體多きを譏るなり、北地は、少陵を學び變律多

可措則矣。

二廢

巧言

釋皎然曰、雖欲廢巧尙直、而神思不得直、雖欲廢言尙意、而典麗不得遺、余謂巧要清雅精練、忌瑣細微密、言要典麗雅重、忌奇僻卑俗。

二概

嚴儀卿曰、詩大概有二、曰優游不迫、曰沈著痛快。

二端

情景

陳繹曾曰、情之感十二、曰喜、怒、哀、懼、愛、欲、惡、憂、羞、惜、思、樂、喜、寓物而見、怒、欲、始

し、初學構則可らず。

二廢

巧言

釋皎然曰、巧を廢し直を尙はんは欲すに雖、而も神思直きを得ず、言を廢し意を尙はんは欲すに雖、而も典麗遺すとを得ず、余謂ふ巧は清雅精練を要す、瑣細微密を忌む、言は典麗雅重を要す、奇僻卑俗を忌む。

二概

嚴儀卿曰、詩、大概二有り、曰優游不迫、曰沈著痛快。

二端

情景

陳繹曾曰、情の感十二、曰喜、怒、哀、懼、愛、欲、惡、憂、羞、惜、思、樂、喜、寓物に寓して見はる、怒は始め張りて終平なる思、樂なり、喜は物に寓して見はる、怒は始め張りて終平なる

張而終平、哀極之而後反、懼在義理中、愛在言外、欲欲動而歸于正、惡欲忠厚、憂憂而有處置、羞不敢盡言、惜著于深愛、思真切則有分數、樂因物而見。

又曰、景之類十二、曰、時候・天文・地理・宮室・人物・鬼神・鳥獸・草木・器物・飲饌・音樂・藝文、景之真四、曰、適煉・扶生・適者適然、意會就寫真景、煨煉之、煉者景少之處、就取真景、煨煉之、扶者枯寂之處、扶取真景、煨煉之、生者幽獨之處、別生真景、煨煉之。

余謂情之才八、曰、親・疎・厚・薄・緩・急・寬・猛也、親者要正、疎者要直、厚者要真、薄者要節、寬者要敏、急者要思、寬者要疾、猛

を欲す、哀は之を極めて後ち反る、懼は義理の中に在り、愛は言外に在り、欲は欲動して正に歸す、惡は忠厚を欲す、憂は言して處置あり、羞は敢へて盡く言はず、惜は深愛に著す、思は真切なれば則分數有り、樂は物に因て見はる。

又曰、景の類十二、曰、時候・天文・地理・宮室・人物・鬼神・鳥獸・草木・器物・飲饌・音樂・藝文なり、景の真四、曰、適・煉・扶・生なり、適は適然意會し、就いて真景を寫して之を煨煉す、煉は景少きの處、就いて真景を取りて之を煨煉す、扶は枯寂の處、真景を扶け取りて之を煨煉す、生は幽獨の處、別に真景を生じて之を煨煉す。

余謂情の才八、曰、親・疎・厚・薄・緩・急・寬・猛なり、親は正を要す、疎は直を要す、厚は真を要す、薄は節を要す、寬は敏を要す、急は思を要す、寬は疾を要す、猛は和を要す、景の品



者要、和、景之品十、曰、即、舊、虛、實、前、後、遠、近、大、小、也、即、景、摸、真、舊、景、摸、懷、虛、景、摸、奇、實、景、摸、正、前、景、摸、想、後、景、摸、思、遠、景、摸、潤、近、景、摸、鮮、大、景、摸、雄、小、景、摸、傲、若、夫、哲、匠、宗、工、不、必、拘、拘、或、情、多、於、景、或、景、繁、於、情、周、伯、弼、分、情、景、爲、二、途、立、四、實、四、虛、等、法、杜、撰、莫、甚、焉。

## (三)

## 三體

聲律 物色 意格

白樂天曰、詩有三體、有竅、有骨、有髓、以聲律爲竅、以物色爲骨、以意格爲髓、余謂竅宜充、忌窳、骨宜壯、忌痿、髓宜潤、忌枯。

十、曰、即、舊、虛、實、前、後、遠、近、大、小、也、即、景、摸、真、舊、景、摸、懷、虛、景、摸、奇、實、景、摸、正、前、景、摸、想、後、景、摸、思、遠、景、摸、潤、近、景、摸、鮮、大、景、摸、雄、小、景、摸、傲、若、夫、哲、匠、宗、工、不、必、拘、拘、或、情、多、於、景、或、景、繁、於、情、周、伯、弼、分、情、景、爲、二、途、立、四、實、四、虛、等、法、杜、撰、焉、れ、よ、り、甚、し、き、は、莫、し。

## (三)

## 三體

聲律 物色 意格

白樂天曰、詩に三體有り、竅有り、骨有り、髓有り、聲律を以て竅と爲し、物色を以て骨と爲し、意格を以て髓と爲す、余謂ふ竅は充つるに宜し、窳を忌む、骨は壯に宜し、痿を忌む、髓は潤に宜し、枯を忌む。

三停

起 中 結

陳繹曾曰、起制古詩、混淪包括、意整語圓、律詩、聲起語圓、中制、古詩、反覆變化、意真語暢、律詩、韻響亮、警峭拔、結制、古詩、含蓄不盡、意重語重、律詩、聲穩語健。

三節

嚴儀卿曰、學詩有三節、其初不識好惡、連篇累牘、肆筆而成、既識羞愧、始生畏縮、成之極難、及其透徹、則七縱八橫、信手拈來、頭頭是道矣。

三體

王元美曰、歌行有三難、起調一也、轉節二也、收結三也、唯收爲尤難、如作平調、

三停

起 中 結

陳繹曾曰、起制、古詩は、混淪包括、意整語圓、律詩は、聲起語圓、中制、古詩は、反覆變化、意真語暢、律詩は、韻響亮、警峭拔、結制、古詩は、含蓄不盡、意重く語重し、律詩は、聲穩語健。

三節

嚴儀卿曰、詩を學ぶに三節有り、其の初め好惡を識らず、連篇累牘、筆を肆にして成る、既に羞愧を識り、始めて畏縮を生ず、之を成す極めて難し、其の透徹するに及んでは、則七縱八橫、手に信せて拈し來る、頭々是れ道なり。

三體

王元美曰、歌行に三難有り、起調一なり、轉節二なり、收結三なり、唯、收尤も難し、爲す、如し平調、舒徐綿麗なる者を作

舒徐綿麗者結須爲雅詞勿使不足令  
 有一唱三歎意奔騰洶湧驅突而來者  
 須一截使住勿留有餘中作奇語峻奪  
 人魄者須令上下脈相顧一起一伏一  
 頓一挫有力無迹方成篇法此是祕密  
 大藏印可之妙余謂兪州印可吾不欲  
 受之所願惟北地衣鉢乎。

## 〔四〕

## 四體

起 承 轉 合

范德機曰起承轉合四字施之絕句則  
 可施之於律則未盡然如遊何將軍十  
 首第一首是起第十首是合中間八首  
 是反覆賦其山林之盛易而置之便不

丹丘詩話卷上

さは、結は須らく雅詞を爲すべし、足らざらしむると勿れ、  
 一唱三歎の意有らしむ、奔騰洶湧、驅突して來る者は、須らく  
 一截住せしめ、有餘を留むる勿るべし、中に奇語の峻にして  
 人の魄を奪ふ者を作さは、須らく上下の脈相顧みしむべし、  
 一起一伏、一頓一挫、力有りて迹無し、方に篇法を成す、此れ  
 は是れ祕密大藏印可の妙なり、余謂ふ兪州の印可、吾之を受  
 るを欲せず、願ふ所は惟、北地の衣鉢か。

## 〔四〕

## 四體

起 承 轉 合

范德機曰起承轉合の四字、之を絶句に施せば則可なり、之を  
 律に施せば則未だ盡く然らず、何將軍に遊ぶ十首の如き、第  
 一首是れ起、第十首是れ合、中間八首、是れ反覆して其の山林  
 の盛を賦す、易へて之を置かば便も不可なり、後の五詩も亦

七

可、後五詩亦然、前後出塞之類、則無不然矣、有一題而二首、則前者不可置後、蓋起句在前者、而合句在後首故也、何獨第二聯爲承、第三聯爲轉耶、泥此則非律詩之法度矣、余謂此說肖矣、而尙未也、范偏說篇法、卻遺章法、夫詩有起結、猶人具頭足矣、何氏山林十首、各具起結、但其連篇次序、秩然不可紊之爾、豈如范所說乎、學者思諸。

## 四深

體勢 作用 聲對 義類  
釋皎然曰、氣象氣氲深於體勢、意度繁薄深於作用、用律不對、深於聲對、用事不直、深於義類、余謂氣之沛也、易、失檢、

然り、前後出塞の類は、則然らざる無し、一題にして二首なる有れば、則前なる者は後に置可からず、蓋、起句前なる者在り、而して合句後首に在るが故なり、何ぞ獨、第二聯を承爲し、第三聯を轉ミ爲さんや、此に泥まば則律詩の法度に非ず、余謂ふ此の説肖たり、而も尙未だし、范は偏に篇法を説き、卻て章法を遺せり、夫れ詩に起結有るは、猶ほ人の頭足を具ふるがごとし、何氏か山林十首、各、起結を具ふ、但、其連篇次序、秩然として之を紊る可らざるのみ、豈范の説く所の如くならんや、學者諸を思へ。

## 四深

體勢 作用 聲對 義類  
釋皎然曰、氣象氣氲は、體勢に深し、意度繁薄は、作用に深し、用律不對は、聲對に深し、用事不直は、義類に深し、余謂ふ氣の沛なるは、檢に失し易し、意の放なるは、運を差へ易し、

意之放也易差運律之用也易忘粘事  
之會也易誤類。

## 四格

## 興趣意理

謝茂秦曰詩有四格太白贈汪倫曰桃花潭水深千尺不及汪倫送我情此興也陸龜蒙詠白蓮曰無情有恨何人見月曉風清欲墮時此趣也王建宮詞曰自是桃花貪結子錯教人恨五更風此意也李涉上于襄陽曰下馬獨來尋故事逢人惟說峴山碑此理也悟者得之庸心以求或失之余謂此最上乘法語而不必執著四詩或可以爲興趣或可以爲意理解之而後可與言悟矣。

律の用は、粘を忘れ易し、事の會は類を誤り易し。

## 四格

## 興趣意理

謝茂秦曰詩に四格有り、太白の汪倫に贈るに曰、「桃花潭水深さ千尺なるも、汪倫が我を送るの情に及ばず」は、此れ興なり、陸龜蒙の白蓮を詠するに曰、「無情恨み有り何人か見る、月曉け風清くして墮らん」欲する時は、此れ趣なり、王建の宮詞に曰、「自らはれ桃花結子を食る、錯て人に五更の風を恨ましむ」は、此れ意なり、李涉の于襄陽に上るに曰、「馬を下りて獨り來り故事を尋ぬ、人に逢ふて惟、説く峴山の碑」は、此れ理なり、悟者は之を得ん、庸心以て求むれば、或は之を失す、余謂ふ此れ最上乘の法語、而して必しも執著せず、四詩或は以て興趣を爲す可く、或は以て意理を爲す可し、之を解して而して後、與に悟を言ふ可し。

(五)

五俗

俗體 俗意 俗句 俗字 俗韻

嚴儀卿曰、學詩先除五俗。

五法

嚴儀卿曰、詩有五法、曰體制、曰格力、曰氣象、曰興趣、曰音節、余謂體制要正、格力要高、氣象要宏、興趣要新、音節要響。

五忌

白樂天曰、格弱則詩不老、字俗則詩不清、才浮則詩不雅、意短則詩不深、意雜則詩不緻。

五故事

正用 反用 借用 暗用 活用

(五)

五俗

俗體 俗意 俗句 俗字 俗韻

嚴儀卿曰、詩を學ぶには、先づ五俗を除け。

五法

嚴儀卿曰、詩に五法有り、曰體制、曰格力、曰氣象、曰興趣、曰音節、余謂ふ體制は正を要す、格力は高を要す、氣象は宏を要す、興趣は新を要す、音節は響を要す。

五忌

白樂天曰、格弱ければ則ち詩老せず、字俗なれば則ち詩清からず、才浮なれば則ち詩雅ならず、意短なれば則ち詩深からず、意雜なれば則ち詩緻ならず。

五故事

正用 反用 借用 暗用 活用

陳繹曾曰、正用的切本題、必然當用反用、用其事而反其意、借用本不切題、借用一端、暗用、用其語而隱其名、活用本非故事、因言及之、此乃用事之妙。

王敬美曰、善使故事者、弗爲故事所使、如禪家云、轉法華、弗爲法華轉、使事之妙、在有而若無、實而若虛、可意悟、不可言傳、可力學、得、不可倉卒得也。

嚴儀卿曰、不必多使事、謝茂秦曰、用事多則流於議論、余謂詩家用事、譬之名將用兵焉、韓信謂漢高帝曰、陛下不過將十萬、臣多多益辨、少陵濟南、正足配之、不可企及耳。

## 五聲變

丹丘詩話卷上

陳繹曾曰、正用は本題に的切し、必然當用、反用は其の事を用ひて而して其の意を反す、借用は本題に切ならず、一端を借用す、暗用は、其の語を用ひて其の名を隱す、活用は、本故事に非ず、因て之に言及す、此れ用事の妙なり。

王敬美曰、善く故事を使ふ者は、故事に使はれず、禪家に云へる法華を轉じて、法華に轉せられざるが如し、事を使ふの妙は、有れども無きが若く、實れども虚きが若く、意悟す可く、言傳す可からず、力學して得べく、倉卒に得べからざるに在るなり。

嚴儀卿曰、多く事を使ふを必とせず、謝茂秦曰、用事多ければ則議論に流るこ、余謂ふ詩家の事を用ふる、之を名將の兵を用ふるに譬ふ、韓信、漢の高帝に謂て曰、陛下は十萬に將たるに過ぎず、臣は多々益辨すこ、少陵、濟南、正に之に配するに足れり、企及す可からざるのみ。

## 五聲變

穩 響 起 嗚 細

陳釋曾曰、聲變兩句不得相併、兩聯不得相似、起宜重濁、承宜平穩、中宜鏗鏘、結宜輕清。

(六)

六設事

夢寐 古人 神示 仙靈 鳥獸 艸木

陳釋曾曰、言夢必依玄、言古必依實、言神必依疑、言仙必依想、託動物必依才、託植物必依類、余謂設事之方、有雅有俗、有正有奇、有虛有實、能者陳平出六奇也、拙者愚刺使奉六條也。

六煖思

穩 響 起 嗚 細

陳釋曾曰、聲變兩句相併すを得ず、兩聯相似るを得ず、起は重濁に宜し、承は平穩に宜し、中は鏗鏘に宜し、結は輕清に宜し。

(六)

六設事

夢寐 古人 神示 仙靈 鳥獸 艸木

陳釋曾曰、夢を言へは必玄に依り、古を言へは必實に依り、神を言へは必疑に依り、仙を言へは必想に依り、動物に託すれば必才に依り、植物に託すれば必類に依る、余謂ふ設事の方、雅有り、俗有り、正有り、奇有り、虛有り、實有り、能者は陳平の六奇を出だすなり、拙者は愚刺使の六條を奉するなり。

六煖思



## 詳 要 博 精 眞 雅

陳釋曾曰、詳、八面中間推尋欲盡、要、痛艾刻取撮出至要、博、博覽羣書悉歸那分、精、合精咀華、嗽、取芳潤、眞、提要煉眞、天然秀出、雅、嗽芳爾雅、加以潤色、余謂思欲詳、不欲碎、欲要不欲簡、欲博不欲雜、欲精不欲麤、欲眞不欲假、欲雅不欲俗。

## 六要

鋪敘 波瀾 用意 琢句 使字

## 下字

楊仲弘曰、詩要鋪敘正、波瀾潤、用意深、

琢句雅、使字當、下字響。

## 六義

569

丹丘詩話卷上

## 詳 要 博 精 眞 雅

陳釋曾曰、詳は、八面中間、推尋盡きんご欲す、要は、痛艾刻取、至要を撮出す、博は群書を博覽し、悉く部分に歸す、精は精を含み華を咀ひ、芳潤を嗽取す、眞は要を提げ眞を煉り、天然秀出す、雅は爾雅に嗽芳し、加ふるに潤色を以てす、余謂ふ思は詳を欲して、碎を欲せず、要を欲して、簡を欲せず、博を欲して雜を欲せず、精を欲して麤を欲せず、眞を欲して假を欲せず、雅を欲して俗を欲せず。

## 六要

鋪敘 波瀾 用意 琢句 使字 下字

楊仲弘曰、詩は鋪敘は正、波瀾は潤、用意は深、琢句は雅、使字は當、下字は響ならんごを要す。

## 六義

又曰詩有六義曰雄渾、曰悲壯、曰平淡、曰蒼古、曰沈著、曰通快、曰優遊、不迫、余謂六義三百之體此當稱品或調乃可夫學雄渾者失在粗豪、學悲壯者失在切肅、學平淡者失在乾枯、學蒼古者失在索莫、學沈著痛快者失在流逸、學優遊不迫者失在懈怠。

## 〔七〕

## 七德

釋皎然曰詩有七德、一識理、二高古、三典麗、四風流、五精神、六質幹、七體裁、余謂識理貴不闇、高古貴不僻、典麗貴不浮、風流貴不乖、精神貴不露、質幹貴不弱、體裁貴不邪。

又曰詩に六義有り、曰雄渾、曰悲壯、曰平淡、曰蒼古、曰沈著、曰通快、曰優遊、不迫、余謂六義は三百の體なり、此れ當に品或は調を稱して乃ち可なるべし、夫れ雄渾を學ぶ者は、失、粗豪に在り、悲壯を學ぶ者は、失、切肅に在り、平淡を學ぶ者は、失、乾枯に在り、蒼古を學ぶ者は、失、索莫に在り、沈著痛快を學ぶ者は、失、流逸に在り、優遊不迫を學ぶ者は、失、懈怠に在り。

## 〔七〕

## 七德

釋皎然曰詩に七德有り、一に識理、二に高古、三に典麗、四に風流、五に精神、六に質幹、七に體裁、余謂識理は不闇を貴ひ、高古は不僻を貴ひ、典麗は不浮を貴ひ、風流は不乖を貴ひ、精神は不露を貴ひ、質幹は不弱を貴ひ、體裁は不邪を貴ぶ。

七戒

楊仲弘曰、詩有七戒、曰差錯、不貫串、曰直置、不宛轉、曰妄誕、不切實、曰綺靡、不典重、曰蹈襲、不識使、曰穢濁、不清新、曰砌合、不純粹。

七體

五言古詩

十九首 曹子建 潘岳 陸機 顏延年 謝靈運

七言古

古樂府 李白 杜甫

五言律

杜甫 王維 孟浩然

排律

丹丘詩話卷上

七戒

楊仲弘曰、詩に七戒有り、曰、差錯、貫串せず、曰、直置、宛轉ならず、曰、妄誕、切實ならず、曰、綺靡、典重ならず、曰、蹈襲、使を識らず、曰、穢濁、清新ならず、曰、砌合、純粹ならず。

七體

五言古詩

十九首 曹子建 潘岳 陸機 顏延年 謝靈運

七言古

古樂府 李白 杜甫

五言律

杜甫 王維 孟浩然

排律

杜甫

## 七言律詩

杜甫 王維 李頎

## 五言絕句

李白 王維

## 七言絕句

李白 王昌齡

陳釋曾曰、十九首、景真情真、事真、意真、澄、至清、發、至精、曹子健、劉劄、精潔、自然、沈健、潘岳、質勝於文、陸機、才思有餘、顏延年、辭氣重厚、謝靈運、構思險怪、而造語精圓、李太白、風度氣魄、高出塵表、善播弄造化、與鬼神競奔、變化極妙、杜子美、體製格式、自成一家、王摩詰、意思從

杜甫

## 七言律詩

杜甫 王維 李頎

## 五言絕句

李白 王維

## 七言絕句

李白 王昌齡

陳釋曾曰、十九首、景真、情真、事真、意真、至清を澄し、至精を發す、曹子建は、劉劄精潔にして、自然に沈健、潘岳は質、文に勝つ、陸機は才思餘有り、顏延年は辭氣重厚、謝靈運は構思險怪にして、造語精圓、李太白は風度氣魄、高く塵表に出で、善く造化を播弄し、鬼神と競奔し、變化極妙、杜子美は體製格式、自ら一家を成す、王摩詰は意思從容、乃古意有り、孟浩然

容乃有古意、孟浩然冲淡中有壯逸之氣、李頎以古意變齊梁、王昌齡齊梁餘風。

余謂陳氏詩譜、歷舉衆家、鑿裁猥雜、不足取焉、今盡沙汰之、標出七體十三家、初學宜模範此數家、乃無旁徑邪路之感矣、謂之濟南緒論、則非知吾者也。

## 〔八〕

八養氣

肅壯清和奇麗古遠

陳釋曾曰、朝廷宗廟宜肅、山河軍旅宜壯、山林神仙宜清、懽娛通達宜和、幽險豪傑宜奇、宮苑佳麗宜麗、覽古搜玄宜

は、冲淡の中に壯逸の氣有り、李頎は古意を以て齊梁を變ず、王昌齡は齊梁の餘風なり。

余謂ふ陳氏の詩譜、衆家を歴舉す、鑿裁猥雜、取るに足らず、今盡く之を沙汰し、七體十三家を標出す、初學宜く此の數家を模範すべし、乃旁徑邪路の感無し、之を濟南の緒論と謂はば、則吾を知る者に非るなり。

## 〔八〕

八養氣

肅壯清和奇麗古遠

陳釋曾曰、朝廷廟は肅に宜し、山河軍旅は壯に宜し、山林神仙は清に宜し、懽娛通達は和に宜し、幽險豪傑は奇に宜し、宮苑佳麗は麗に宜し、覽古搜玄は古に宜し、登臨志士は遠に

古登臨志士宜遠

八妙

徐昌穀曰、朦朧萌折情之來也、汪洋曼衍情之沛也、連翩絡屬情之一也、馳軼步驟氣之達也、簡練揣摩思之約也、頡頏疊貫之齊也、混沌貞粹質之檢也、明雋清圓詞之藻也。

王敬美曰、每一題到、茫然思不相屬、幾謂無措、沈思久之、如飯水去、室亂絲抽、緒種種縱橫、盆集卻於此時、要下剪裁手段、寧割愛勿貪多、又如數萬健兒、人各自爲一營、非得大將軍方畧、不能整頓攝服、使一軍無譁、若爾朱榮處貼萬榮百萬衆、求之詩家、誰當爲比。

宜し。

八妙

徐昌穀曰、朦朧萌折は、情の來るなり、汪洋曼衍は、情の沛するなり、連翩絡屬は情の一なるなり、馳軼步驟は氣の達するなり、簡練揣摩は、思の約なるなり、頡頏疊貫は、韻の齊ふなり、混沌貞粹は質の檢するなり、明雋清圓は、詞の藻あるなり。

王敬美曰、一題到る毎に、茫然として思、相屬せず、幾ど措く無しと謂ふ、沈思久ふして飯水の室を去り、亂絲の緒を抽くが如し、種々縱横盆集す、卻て此の時に於て剪裁の手段を下すを要す、寧ろ愛を割くとも、多きを貪る勿れ、又數萬の健兒、人各自ら一營を爲すが如し、大將軍の方畧を得るに非ざれば、整頓攝服し、一軍無からしむる能はず、爾朱榮の、萬衆が百萬衆を處貼するが若し、之を詩家に求むるに、誰か當に比を爲すべき。

余謂求之詩家、則曹子建、李太白、王元美、配之耳。

〔九〕

九品

嚴儀卿曰、詩有九品、曰高、曰古、曰深、曰遠、曰長、曰雄渾、曰飄逸、曰悲壯、曰淒婉。

九準

立意 鍊句 琢對 寫景 寫意

書事 用事 下字 押韻

楊仲弘曰、立意、要高古渾厚、有氣槩、忌卑弱淺陋、鍊句、要雄偉清健、有金石聲、琢對、要寧拙毋巧、寧朴毋華、忌俗野、寫景、要細密清淡、忌庸腐雕巧、寫意、要景中含意、意中帶景、議論發明、運思清淺。

余謂ふに之を詩家に求めば、則曹子建・李太白・王元美、之に配するに足るのみ。

〔九〕

九品

嚴儀卿曰、詩に九品有り、曰高、曰古、曰深、曰遠、曰長、曰雄渾、曰飄逸、曰悲壯、曰淒婉。

九準

立意 鍊句 琢對 寫景 寫意 書事 用事 下字

押韻

楊仲弘曰、立意は、高古渾厚、氣槩有るを要す、卑弱淺陋を忌む、鍊句は、雄偉清健、金石の聲有るを要す、寧ろ拙なるも巧なる毋く、寧ろ朴なるも華なる母きを要す、俗野を忌む、寫景は、細密清淡を要す、庸腐雕巧を忌む、寫意は、景中に意を含み、意中に景を帯び、議論發明、運思清淺を要す、書事は、大に

書事如大而國事、小而家事、心事、用事要、因彼證此、不可著迹、雖小事亦當活用、下字要精思、宜的當、如老杜飛星過水白、落月動蒼虛、鍊中間一字、地坼江帆隱、天晴木葉聞、鍊末後一字、押韻要穩健、則一句有精神、如柱礎欲其堅牢也。

余謂楊下字之說、此古來字眼之說也、胡元瑞駁之曰、硯之有眼、硯之病、詩之有眼、詩之病、是也、然尙未也、杜公飛星之聯、非用意過動二字、乃鍊白虛二字、地坼之聯、非研精隱聞二字、乃鍊坼晴二字、此古人未說破處、大概下奇字、易下平字、難、盛唐諸家於是選矣、不知者

して國事、小にして家事、心事の如く、用事は、彼に因て此を證するを要す、迹を著く可からず、小事なりき雖も、亦當に活用すべし、下字は精思を要す、宜く的當すべし、老杜が「飛星水を過ぎて白く、落月簷を動かして虛なり」の如き、中間の一字を鍊る、「地坼けて江帆隱れ、天晴れて木葉聞ゆ」、最後の一字を鍊る、押韻は穩健を要す、則一句精神有り、柱礎の其の堅牢を欲するが如きなり。

余謂ふ楊が下字の説は、此れ古來字眼の説なり、胡元瑞之を駁して曰、硯の眼有るは硯の病、詩の眼有るは詩の病、是なり、然れども尙未し、杜公が飛星の聯は、意を過動の二字に用ふるに非ず、乃、白虛の二字を鍊る、地坼の聯は、精を隱聞の二字に研くに非ず、乃、坼晴の二字を鍊る、此れ古人未だ說破せざる處、大概奇字を下すは易し、平字を下すは難し、盛唐諸家はに於て選れたり、知らざる者は見て以て平見濛泊を爲す、



見以爲平易澹泊、知者以爲八珍九醞、  
微矣精矣。

〔十〕

十病

體制散亂	七情相干	無情無主
非時失地	用事差說	意思邪僻
音率律亂	字俗語繁	字腐語碎
言譏心刻		

十悟

徐廷卿曰、或約旨以植義、或宏文以叙心、或緩發如朱弦、或急張如躡枯、或始迅以中留、或既優而後促、或慷慨以任壯、或悲悽以引泣、或因拙而得工、或發奇而似易。

丹丘詩話卷上

知る者は以て八珍九醞を爲す、微なるかな精なるかな。

〔十〕

十病

體制散亂す	七情相干す	情無く主無し	時に非ず地を
失ふ	事を用ひて説を差ふ	意思邪僻	音率にして律亂
る	字俗にして語繁し	字腐り語碎く	言譏り心刻む

十悟

徐廷卿曰、或は旨を約して、以て義を植て、或は文を宏にして以て心を敘し、或は緩發して、朱弦の如く、或は急張して躡枯の如く、或は始め迅くして以て中を留り、或は既に優にして後に促り、或は慷慨にして以て壯に任じ、或は悲悽にして以て泣を引き、或は拙に因て工を得、或は奇を發して易に似たり。

右詩法十條、舉列前賢之言、開附鄙意、亦以一隅示三隅耳、善讀者、玩索有獲、則於詩道思過半矣。

右詩法十條、前賢の言を列舉し、開附鄙意を附す、亦一隅を以て三隅を示すのみ、善く讀む者、玩索して獲る有らば、則詩道に於て思ひ半に過ぎん。

# 丹丘詩話卷上

畢

2  
丹丘詩話卷中

平安 芥煥彦 章著

關元常子恆按

詩體品

五律二首

臨洞庭

孟浩然

杜子美

八月湖水平、涵虛混太清孟

劉會孟曰、起得渾渾稱題、○譚元春曰、

多少厚、○劉曰、八月補題不足、○余按、

平字最妙、涵虛狀湖之清曠混太清、與

天相連也。

詩體品

五律一首

洞庭に臨む

孟浩然

杜子美

八月湖水平なり、虚を涵して太清に混ず、孟

劉會孟曰、起し得て渾々題に稱ふ、○譚元春曰、多少の厚、○

劉曰、八月、題の不足を補ふ、○余按するに、平の字最妙、虚を

涵すは湖の清曠を狀す、太清に混するは、天と相連なるなり。

昔聞洞庭水、今上岳陽樓杜

唐仲言曰、言洞庭之水、昔嘗聞之矣、今登岳陽樓、始見其廣、○余按、二起句、孟爲優、杜對起、頗覺率易。

氣蒸雲夢澤、波撼岳陽城孟

劉曰、蒸、撼、自然、不是下字、而氣槩橫絕、朴不可易、○余按、蒸、雲、夢、撼、岳、陽、極言其壯。

吳楚東南坼、乾坤日夜浮杜

蔣一夔曰、吳楚二語、移不去、坼與浮、句中眼也、○顧震曰、地裂開曰坼、吳與楚相接、言此湖在吳之南、楚之東、極言洞庭連亘之廣也、水經注湖水廣圓五百餘里、日月若出、沒于其中、故日夜之間、

昔聞く洞庭の水、今上る岳陽樓、杜

唐仲言曰、言ふは洞庭の水、昔嘗て之を聞けり、今、岳陽樓に登て、始めて其の廣きを見る、○余按するに、二起句、孟を優れり、爲す、杜か對起頗る率易を覺ふ。

氣は雲夢澤を蒸し、波は岳陽城を撼かす、孟

劉曰、蒸、撼、自然、是れ下字にあらす、而して氣槩橫絶、朴にして易ふ可からず、○余按するに、雲夢を蒸し、岳陽を撼かすは、其の壯を極言す。

吳楚東南に坼け、乾坤日夜に浮ぶ、杜

蔣一夔曰、吳楚の二語、移し去らず、坼と浮とは句中の眼なり、○顧震曰、地裂け開くを坼と曰ふ、吳と楚と相接す、言ふは此の湖は吳の南楚の東に在り、洞庭連亘の廣きを極言するなり、水經の注に、湖水廣圓五百餘里、日月、其の中に出沒するが若し、故に日夜の間、時として天地と相浮盪せざるは

無時不與天地相浮盪。乾坤似反爲其所浸者然。○余按、二聯真正敵手、難以優劣、以余言之、杜爲優。○董斯張曰、葉敬君書肆說鈴曰、岳陽樓詩、若無吳楚東南圻一句、則乾坤日夜浮、疑於詠海矣、不如孟詩氣蒸雲夢澤、波撼岳陽城、得洞庭眞景也。按、鄺善長水經注云、洞庭湖廣五百里、日月若出沒其中、少陵實本此意、不讀鄺生書、不知杜句之妙也。或疑洞庭楚地、何得以吳系之、按、盛弘之荊州記、君山在洞庭湖中、上有道通吳之包山、故得名耳。陰鏗青艸湖詩、穴去茅山近、江連巫峽長、吳楚東南、自是洞庭本色、確不可易。又王子年拾遺

無し、乾坤反て其れに浸さるゝ者（註）の似く然り。○余按するに、二聯は真正の敵手、以て優劣し難し、余を以て之を言へば、杜を優れり（註）と爲す。○董斯張曰、葉敬君の書肆說鈴に曰、岳陽樓の詩、若し、「吳楚東南に圻く」の一句無ければ、則、乾坤日夜に浮ぶ（註）は、海を詠するに疑あり。孟頫が詩の「氣は雲夢澤を蒸し、波は岳陽城を撼かす」の、洞庭の眞景を得たるに如かざるなりと。按ずに、鄺善長の水經注に云ふ、洞庭湖廣さ五百里、日月其の中に出沒するが如しと、少陵實に此の意に本く、鄺生が書を讀まざれば、句の妙を知らざるなり、或は疑ふ。洞庭は楚地なり、何ぞ吳を以て之に承くるを得ん（註）と、按ずるに、盛弘之の荊州記に、君山は洞庭湖の中に在り、上に道有り、吳の包山に通ず、故に名を得るのみ、陰鏗が青艸湖の詩に、「穴は茅山を去て近く、江は巫峽に連りて長し」と、吳楚東南は、自らはれ洞庭の本色、確（註）として易ふ可からず、又王子年の拾遺記に云ふ、洞庭山、水上に浮ぶ、楚の懷王の時、秀才を

記云、洞庭山浮於水上、楚懷王時、舉秀才賦詩於水涓、故云瀟湘洞庭之樂、一浮字、少陵亦不肯泛用如此。

欲濟無舟楫、端居恥聖明、孟

劉曰、端居、感興深厚、○唐仲言曰、欲濟而無舟楫、以興欲仕而無其才、是以端居而愧此明時也。

余按、三聯因所臨而興、感言懷才不售、如濟川無舟楫、而有負聖君也、唐解甚謬、○鍾伯敬曰、二語有用世之思。

親朋無一字、老病有孤舟、杜

唐曰、親朋無一字相問、惟孤舟爲家也、○蔣云、有孤舟、言無家也、○顧曰、親朋既無字、而老病中尙賴有孤舟、可以浮

舉、詩を水涓に賦せしむ、故に云ふ、瀟湘洞庭の樂、一の浮の字、少陵亦肯て泛用せざる、此の如し。

濟らん、欲して舟楫無し、端居聖明に恥づ、孟

劉曰、端居は、感興深厚、○唐仲言曰、濟らん、欲するも而も舟楫無し、以て仕へん、欲するも而も其の才無きを興す、是を以て端居して此の明時に愧づるなり。

余按するに、三聯、所臨に因て感を興す、言ふは才を懷いて售れず、川を濟るに舟楫無きが如し、而して聖君に負く有るなり、唐か解甚だ謬れり、○鍾伯敬曰、二語用世の思有り。

親朋一字無く、老病孤舟有り、杜

唐曰、親朋一字の相問ふ無く、惟、孤舟を家と爲すなり、○蔣云ふ、孤舟有るは、家無きを言ふなり、○顧曰、親朋既に字無し、而して老病中に尙ほ賴に孤舟有り、以て浮泛を眺す可し、

泛登眺、差足自慰、余按三聯巧力相等、孟越勝法、杜法勝越、孟爲優然、

坐觀垂釣者、徒有羨魚情、孟

劉曰、末語言有盡而意無窮、○唐曰、見釣者之得魚、不無欣慕意、然結網未遑、則亦徒然興羨耳、○鍾云、孟詩、人知其雄大、不知其溫厚、

戎馬關山北、憑軒涕泗流、杜

唐曰、吐蕃內侵、戎馬在北、故憑軒之際、傷已哀、時不覺涕泗流、○余按、二結各擅其美、杜憂感宏放、孟涵蓄深遠、杜氣勝韻、孟韻勝氣、要之、杜爲優然、○方萬里曰、予登岳陽樓、左序毳門壁間大書孟詩、右書杜詩、後人不敢復題也、劉長

差々自ら慰するに足る、○余按するに、三聯巧力相等し、孟は、越、法に勝つ、孟を優然と爲す。

坐して釣を垂るゝ者を觀る、徒に魚を羨む情あり、孟

劉曰、末語、言盡る有りて、意窮り無し、○唐曰、釣者の魚を得るを見て、欣慕の意無きにあらず、然れども網を結ぶ未だ遠あらず、則亦徒然羨を興すのみ、○鍾云、孟が詩、人、其の雄大なるを知りて、其の溫厚なるを知らず。

戎馬關山の北、軒に憑りて涕泗流る、杜

唐曰、吐蕃内侵し、戎馬北に在り、故に軒に憑るの際、己を傷み時を哀み、涕泗の流るゝを覺えず、○余按するに、二結各、其の美を擅にす、杜は憂感宏放、孟は涵蓄深遠、杜は氣韻に勝つ、孟は韻、氣に勝つ、之を要するに、杜を優然と爲す、○方萬里曰、予、岳陽樓に登るに、左序毳門の壁間に孟の詩を大書し、右に杜の詩を書す、後人敢て復た題せざるなり、劉長卿

卿云、墨浪浮元氣、中流沒大陽、世不其

傳、其餘可知矣。

七言律四首

早朝大明宮

王維

岑參

賈至

杜甫

絳幘雞人報曉籌、尙衣方進翠雲裘、王

唐曰、言天子將早朝、故未旦而雞人傳

漏箭、尙衣進御服也、○余按、五更春氣

尙寒、故進裘禦寒也。

雞鳴紫陌曙光寒、鸞囀皇州春色闌、岑

唐曰、言趨朝而雞始唱、故曙光猶寒、既

而聞鶯聲、則知春色將暮矣。

云ふ、「墨浪元氣を浮べ、中流大陽を沒す」と、世に甚だ傳へず、其餘知る可し

七言律四首

早に大明宮に朝す

王維

岑參

賈至

杜甫

絳幘の雞人曉籌を報ず、尙衣方に進む翠雲裘、王

唐曰、言ふは天子將に早朝せんことを、故に未だ旦ならずして

雞人漏箭を傳へ、尙衣御服を進むるなり、○余按するに、五更

春氣尙は寒し、故に裘を進め寒を禦くなり。

雞鳴て紫陌曙光寒く、鸞囀じて皇州春色闌なり、岑

唐曰、言ふは朝に趨き而して雞始めて唱ふ、故に曙光猶は寒し、既にして鶯聲を聞き、則ち春色將に暮れんことを知れり。



銀燭朝天紫陌長、禁城春色曉蒼蒼、賈

唐曰、言秉燭趨朝、而御道更遠、禁城春色味晦未辨也。

五夜漏聲催曉箭、九重春色醉仙桃、杜

顥曰、味爽之初、天子視朝、而禁內春色爛熳、其桃盛開、若含醉也。

黃維章曰、早朝詩合看賈王岑詩、方知老杜作法之高、匠心之苦、題是早朝、賈王岑俱實說早字、杜曰、五夜漏聲催曉箭、從夜言早、先一步說、催字尤寫出臣子夜坐待旦心事、次句、賈岑俱板填春色、杜曰、九重春色醉仙桃、謂日將升而東方紅氣現也、摸寫色中之況、深一層

說。

銀燭天に朝して紫陌長し、禁城の春色曉蒼々、賈

唐曰、言ふは燭を乗り朝に趨く、而して御道更に遠し、禁城の春色、味晦にして未だ辨ぜざるなり。

五夜の漏聲曉箭を催し、九重の春色仙桃に酔ふ杜

顥曰、味爽の初め、天子、朝を視、而して禁内春色爛熳、其の桃盛に開き、酔を含むが若きなり。

黃維章曰、早朝の詩、賈・王・岑の詩を合せ看て、方に老杜が作法の高く、匠心の苦を知る、題は是れ早朝、賈王岑俱に早字を實說す、杜は曰ふ、「五夜の漏聲曉箭を催す」ミ、夜より早を言ふ、一步を先んじて説く、催の字、尤、臣子夜坐、旦を待つ的心事を寫し出たす、次句、賈岑俱に春色を板填す、杜は曰ふ、「九重の春色仙桃に酔ふ」ミ、日將に升らんとして、東方の紅氣現はるを謂ふなり、色中の況を摸寫す、一層を深くして説く。

余按、四起各專其美、以余論之、王韻度深厚爲第一、岑對起富麗爲第二、賈氣象高華爲第三、杜格調雄渾爲第四、

九天闔闔開宮殿、萬國衣冠拜冕旒、王

唐曰、宮門開、群臣入、拜舞之禮正畢也。

金闕曉鐘開萬戶、玉階仙仗擁千官、岑

唐曰、鐘鳴而宮門開、仗出而朝班齊也。

千條弱柳垂青鎖、百囀流鶯遶建章、賈

唐曰、及至宮天始明、則柳垂鶯囀、燦然

可觀。

旌旗日暖龍蛇動、宮殿風微燕雀高、

顧震曰、旌旗所畫龍蛇、當春暖、旌旗飛

而龍蛇亦若起、蟄者殿屋最高、風稍壯、

則燕雀不免搶地矣、因風微、得高飛至、

余按するに、四起各其の美を專にす、余を以て之を論すれば、王が韻度深厚、第一と爲す、岑が對起富麗、第二と爲す、賈が氣象高華、第三と爲す、杜が格調雄渾、第四と爲す。

九天の闔闔宮殿を開き、萬國の衣冠冕旒を拜す、

唐曰、宮門開け、群臣入り、拜舞の禮正に畢るなり。

金闕の曉鐘萬戸を開き、玉階の仙仗千官を擁す、

唐曰、鐘鳴りて宮門開け、仗出でて朝班齊ふなり。

千條の弱柳青鎖に垂れ、百囀の流鶯建章を遶る、

唐曰、宮に至るに及んで天始めて明く、則ち柳垂れ鶯囀す、燦然として觀る可し。

して觀る可し。

旌旗日暖にして龍蛇動き、宮殿風微にして燕雀高し。

顧震曰、旌旗に畫く所の龍蛇、春暖に當て、旌旗飛で龍蛇も亦

蟄より起くる者の若し、殿屋最高く、風稍壯なれば、則ち燕雀

地を搶くを免れず、風の微なるに因て、高飛して殿屋に至る

殿屋也。

黃曰初聯俱拈大明宮、王岑俱實說宮中、杜曰宮殿風微、燕雀高、以宮外景物擴一步說、賈句亦屬宮外景物、然語真而味有盡、不如微高二字之曲折。

余按初聯王岑雄渾富麗、爭勝毫釐、以余言之、王氣韻勝岑一等、故王爲第一、岑爲第二、賈說景富麗爲第三、杜骨力雄健爲第四。

日色纔臨仙掌動、香煙欲傍袞龍浮、王

唐曰、拜舞之禮畢、而始見日出、香浮也。  
○余按、纔欲二字、摸寫極妙、臨傍動浮、鍛鍊無痕。

花迎劔佩星初落、柳拂旌旗露未乾、岑

を得るなり。

黃曰初聯俱に大明宮を拈す、王岑俱に宮中を實説す、杜は曰ふ、「宮殿風微にして燕雀高し」を宮外の景物を以て、一步を擴めて説く、賈か句も亦宮外の景物に屬す、然れども語真にして味盡る有り、微高二字の曲折なるに如かず。

余按するに、初聯王岑は雄渾富麗、勝を毫釐に争ふ、余を以て之を言へば、王が氣韻岑に勝るを第一等、故に王を第一と爲し、岑を第二と爲す、賈か説景富麗、第三と爲す、杜か骨力雄健、第四と爲す。

日色纔に仙掌に臨んで動き、香煙袞龍に傍ふて浮ばんと欲す。

唐曰、拜舞の禮畢り、而して始めて日出で香浮ぶを見るなり、  
○余按するに、纔欲の二字、摸寫極めて妙、臨・傍・動・浮、鍛鍊痕無し。

花は劔佩を迎へて星初めて落ち、柳は旌旗を拂ふて露未だ乾かず。

唐曰、花柳芬菲、星沈露滴、早朝之景麗矣。○余按、迎拂落乾、工致自然。

劍珮聲隨玉墀步、衣冠身惹御爐香、賈

唐曰、百僚就列、劍珮趨蹌、御爐香浮、衣冠芬馥也。○余按、隨惹二字、鍛鍊出來。

朝罷香煙攜滿袖、詩成珠玉任揮毫、杜

邵夢弼曰、香煙滿袖、卽賈詩衣冠身惹御爐香者、謂居近侍也、揮毫珠玉、才敏而詩工也、黃曰、聯內同拈朝意、賈則劍珮聲隨玉墀步、王則萬國衣冠拜冕旒、岑則玉階仙仗擁千官、俱實寫朝字、杜但以朝罷二字點綴、人詳我畧、至於同用爐煙香氣、賈王俱說殿內煙況、杜曰、朝罷香煙攜滿袖、從出殿退一步說、衣

唐曰、花柳芬菲、星沈露滴、早朝之景麗はし、○余按するに、迎拂落乾、工致自然なり。

劍珮の聲は玉墀の歩に隨ひ、衣冠の身は御爐の香を惹く、

唐曰、百僚列に就き、劍珮趨蹌、御爐香浮ぶ、衣冠の芬馥なり、○余按するに、隨惹の二字、鍛鍊し出し來る。

朝罷て香煙攜へて袖に滿ち、詩成つて珠玉毫を揮ふに在り、

邵夢弼曰、香煙袖に滿つ、卽、賈か詩に衣冠の身、御爐の香を惹く者にして、近侍に居るを謂ふなり、毫を揮ふ珠玉は、才敏にして詩工なり、黃曰、聯内同く朝意を拈す、賈は則劍珮の聲は玉墀の歩に隨ふ、王は則萬國の衣冠冕旒を拜す、岑は則ち玉階の仙仗千官を擁す、俱に朝の字を實寫す、杜は但、朝罷の二字を以て點綴す、人は詳、我は略、同く爐煙香氣を用ふるに至る、賈王俱に殿内の煙況を説く、杜曰、朝罷罷んで香煙攜へて袖に滿つ、殿を出づるより一步を退きて説く、衣

冠袞龍不如滿袖之奇、爲惹爲浮、不如攜歸之奇也。

余按、次聯王岑高華精緻、斤兩相同、王韻度勝岑、故王爲第一、岑爲第二、賈富麗巧密爲第三、杜氣骨蒼老爲第四。

朝罷須裁五色詔、珮聲歸向鳳池頭、王

唐曰、朝將罷矣、舍人掌絲綸、故美其退居中書以艸詔也。

獨有鳳皇池上客、陽春一曲和皆難、岑

唐曰、能賦朝景者、其惟鳳池之舍人乎、舍人之詩、眞陽春寡和者也。

共沐恩波鳳池上、朝朝染翰侍君王、賈

唐曰、我與諸公沐恩波於鳳池深矣、可不夙夜競競、奉文墨以侍天子乎。

冠袞龍は滿袖の奇に如かず、惹き爲し浮き爲す、攜歸の奇に如からざるなり。

余按するに、次聯王岑は高華精緻、斤兩相同し、王は韻度、岑に勝る、故に王を第一と爲し、岑を第二と爲す、賈は富麗、巧密、第三と爲す、杜は氣骨蒼老、第四と爲す。

朝し罷んで須らく五色の詔を裁すべし、珮聲歸りて鳳池の頭に向ふ、王

唐曰、朝將に罷めん、舍人絲綸を掌る、故に其の中書に退居して、以て詔を艸するを美むるなり。

獨、鳳皇池上の客のみ有りて、陽春の一曲和する皆難し、岑

唐曰、能く朝景を賦する者は、其れ惟鳳池の舍人か、舍人の詩は眞に陽春和する者寡きなり。

共に恩波に沐す鳳池の上、朝々翰を染めて君王に侍す、賈

唐曰、我れ諸公と恩波に鳳池に沐すること深し、夙夜競々として文墨を奉し以て天子に侍せざる可けんや。

欲知世掌、絲綸美、池上于、今有鳳毛、杜

顥曰、因賈詩有鳳池二字、遂云、池上于

今有鳳毛、蓋世掌絲綸、惟賈氏爲然、

黃曰、結句同用鳳池故事、賈王岑俱係

實用全用、杜曰、池上于、今有鳳毛、以鳳

池入超宗之鳳毛、折用翻用無復用事

之跡、同用日動、同用旌旗、奇平淺深、判

然相隔矣。○余按、四結俱妙、王以鳳聲

點、綴朝歸、餘情不盡、故王爲第一、賈結

越典重、爲第二、岑結韻蘊藉爲第三、杜

用事無痕、爲第四、

顧華玉曰、右丞早朝、真與老杜頡頏、後

岑參及之、他皆不及、蓋氣象闊大、音律

雄渾、句法典重、用字新清、無所不備、故

世掌絲綸之美、知らん、欲せば、池上今に鳳毛有り、杜

顥曰、賈か詩鳳池の二字有るに因つて、遂に云ふ、「池上今に

鳳毛有り」と、蓋、世、絲綸を榮る、惟、賈氏を然りと爲す。

黃曰、結句同く鳳池の故事を用ふ、賈王岑、俱に實用全用に係

る、杜曰、「池上今に鳳毛有り」と、鳳池を以て超宗の鳳毛に入

り、折用翻用、復た事を用ふるの跡無し、同く日動を用ひ、同

く旌旗を用ひ、奇平淺深、判然相隔たる、○余按するに、四結

俱に妙、王は鳳聲を以て朝歸を點綴して、餘情不盡、故に王を

第一と爲す、賈は結越典重、第二と爲す、岑は結韻蘊藉第三

と爲す、杜は事を用ふるに痕なし第四と爲す。

顧華玉曰、右丞が早朝、真に老杜と頡頏す、後、岑參之に及ぶ、

他皆及はず、蓋、氣象闊大、音律雄渾、句法典重、用字新清、備

らざる所無きが故なり、或ひとは猶未だ美を全うせずとす、

らざる所無きが故なり、或ひとは猶未だ美を全うせずとす、

也或猶未全美以用衣服字太多耳。

田子藝曰、諸公唱和、岑詩當爲首、惜寒  
闌、乾、難、四、字、不、佳、耳。

顧華玉曰、賈詩只是好結、音律雄渾、中  
聯參差、不及王岑遠甚。

黃維章曰、賈王岑三首、意與句皆順流  
而下、雖三首皆佳、未免雷同、惟杜變幻  
之極、苦心妙法、不得草草看過。

唐仲言曰、岑王矯矯不相下、舍人則歷  
行、少陵當退舍、蓋尺有所短、寸有所長、  
不當以一詩議優劣也、施愚山曰、早朝  
詩、惟杜甫無法、既題早朝、則雞鳴曉鐘  
衣冠圍圍、律法如是矣、王維歎于岑參  
者、岑解以花迎柳拂陽春一曲、補舍人

衣服の字を用ふるこゝ太多きを以てのみ。

田子藝曰、諸公の唱和、岑か詩、當に首を爲すべし、惜むらく  
は、闌、寒、乾、難の四字佳ならざるのみ。

顧華玉曰、賈か詩只是好結、音律雄渾、中聯參差、王岑に及ば  
ざる遠きこゝ甚し。

黃維章曰、賈王岑の三首、意と句と皆順流して下る、三首皆佳  
なりと雖、未だ雷同を免れず、惟、杜、變幻之極、苦心の妙法、  
草々看過するを得ず。

唐仲言曰、岑王は矯々相下らず、舍人は則雁行す、少陵は當に  
退舍すべし、蓋し、尺も短き所有り、寸も長き所有り、當に一  
詩を以て優劣を議すべからざるなり。

施愚山曰、早朝の詩、惟、杜甫法無し、既に早朝を題すれば、  
則雞鳴曉鐘、衣冠圍圍、律法是の如し、王維は岑參より歎なる  
は、岑は解く花迎柳拂陽春一曲を以て、舍人の原唱春色の

原唱春色二字、則王稍減耳、杜卽不然、王母仙桃非朝事也、堂成而燕雀賀、非朝事境也、五夜便日暖耶、舛也、且日暖非早時也、若夫旌旗之動、宮殿之高、未嘗朝者也、曰朝罷亂也、詩成於早朝半、四句乏主客、此杜之無法也、余謂、諸說中、唐仲言爲至矣、黃偏主杜、好而不知其惡者也、施偏排杜、惡而不知其美者也、余所不取矣、今定王爲首、諸家或有左袒岑者、此眩其巧麗耳、格調韻度終當讓王一等也、若夫譏王多用衣服字、則癡人說夢、非知詩者也。

## 五絶四首

鹿柴

王維

二字を補へば、則稍減するのみ、杜は即ち然らず、王母仙桃は朝事に非るなり、堂成りて燕雀賀す、朝事の境に非るなり、五夜便ち日暖ならんや、舛へり、且日暖は早時に非るなり、夫の旌旗の動く、宮殿の高きが若きは、未だ嘗て朝せざる者なり、曰、朝罷は亂なり、詩成る早朝の半に於てす、四句、主客に乏し、此れ杜法無きなり、余謂ふ、諸說の中、唐仲言を至れりと爲す、黃は偏に杜を主とす、好みて其の惡しきを知らざる者なり、施は偏に杜を排す、惡みて其美を知らざる者なり、余の取らざる所なり、今主を定めて首と爲す、諸家或は岑に左袒する者有るは、此れ其の巧麗に眩するのみ、格調韻度、終に當に主に讓る、こゝ一等なるべし、夫の王が多く衣服の字を用ふるを譏るが若きは、則癡人の夢を説くなり、詩を知る者に非るなり。

## 五絶四首

鹿柴

王維



## 裴迪

空山不見人，但聞人語響。返景入深林，復照青苔上。

劉曰、無言而有畫意、○李賓之曰、淡而濃、近而遠、○唐曰、不見人、幽矣、聞人語、則非寂滅也、景照青苔、冷淡自在、○鍾曰、復照妙甚。

日夕見寒山，便爲獨往客。不知深林事，但有麝麋跡。

劉曰、亦自閒悠、右丞便不涉鹿字、○唐曰、見山之時、未嘗有伴、誰復知松間事乎、所可觀者、獨麝麋跡耳、○余按、裴不爲不佳、王以韻勝、有聲有色、超超玄著。

竹里館

王維

丹丘詩話中卷

## 裴迪

空山人を見ず、但、人語の響きを聞く、返景深林に入りて、復た青苔の上を照らす。

劉曰、言無くして畫意有り、○李賓之曰、淡にして濃、近にして遠、○唐曰、人を見ずとは、幽なり、人語を聞けば則ち寂滅に非るなり、景、青苔を照らす、冷淡自在、○鍾曰、復照、妙甚し。

日夕寒山を見る、便ち獨往の客と爲る、深林の事を知らず、但麝の跡有り。

劉曰、亦自閒悠、右丞は便ち鹿の字に涉らず、○唐曰、山を見るの時未だ嘗て伴有り、誰れか復た松間の事を知らんや、觀る可き所の者は、獨麝麋の跡のみ、○余按するに、裴、不佳と爲さず、王は韻を以て勝る、聲有り色有り、超々玄著。

竹里館

王維

三七

獨坐幽篁裏、彈琴復長嘯、深林人不知、明月來相照。

劉曰、幽迴之思、○唐曰、林間之趣、人不易知、明月相照、似若會意。

來過竹裏館、日與道相親、出入惟山鳥、幽深無世人。

余按、裴此首淺俗、不堪并論、右丞輞川諸詩、首首素淨、超凡入玄、惜裴非對手、著著輒負假使孟襄陽、與之對陳、則未知鹿死誰手也。

## 七絶六首

西宮春怨

王昌齡

長門怨

李白

獨、幽篁の裏に坐し、琴を弾じて復た長嘯す、深林人知らず、明月來りて相照らすを。

劉曰、幽迴の思ひ、○唐曰、林間の趣は人知り易からず、明月相照らし、意を會するに似たり。

來り過ぐ竹裏館、日に道と相親む、出入惟、山鳥、幽深世人無し。

余按するに、裴か此の首、淺俗にして並べ論するに堪へず、右丞か輞川の諸詩、首々素淨、凡を超へ玄に入る、惜むらくは裴は對手に非ず、著々輒ち負く、假使孟襄陽、之と對陳せば、則未だ鹿の誰が手に死するを知らざるなり。

## 七絶六首

西宮春怨

王昌齡

長門怨

李白

西宮夜靜百花香、欲捲朱簾春恨長、王

劉曰、情景兩絶、○唐曰、夜靜花香、景極佳矣、吾其捲簾待月乎、春恨方長、弗能捲也。

斜抱雲和深見月、隴隴樹色隱昭陽、

唐曰、抱琴而出中庭、則見月矣、乘月而望昭陽、乃爲樹色所隱、思一見而不可得、其怨恨何如耶、簾旣不捲、色從傍出、故云、斜宮殿陰沈、月不易覩、故云、深、此見古人用字不苟處、○余按、斜抱雲和、橫琴於膝也、捲簾坐望月、故云、深、見字法工密、唐牽強爲說可笑。

天廻北斗掛西樓、金屋無人螢火流、李

蔣士贊曰、詩注、燐螢火也、箋曰、此物家

西宮夜靜にして百花香し、朱簾を捲かんじ欲して春恨長し。王

劉曰、情景兩絶、○唐曰、夜靜に花香し、景極めて佳なり、吾其れ簾を捲き月を待たんか、春恨方に長し、捲く能はざるなり。

斜に雲和を抱いて深く月を見る、隴々たる樹色昭陽を隠す。

唐曰、琴を抱いて中庭に出づれば、則月を見る、月に乘じて昭陽を望めば、乃樹色に隠さる、一見を思ふて得べからず、其の怨恨如何ぞや、簾旣に捲かず、色、傍より出づ、故に斜に云ふ、宮殿陰沈、月、覩易すからず、故に深と云ふ、此れ古人字を用ふる苟もせざる處を見る、○余按するに斜に、雲和を抱くは琴を膝に横ふるなり、簾を捲き坐して月を望む、故に深と云ふ、見の字法、工密、唐、牽強、説を爲す、笑ふ可し。

天、北斗を廻らし西樓に掛く、金屋人無くして螢火流る、李

蔣士贊曰、詩の注に、燐は螢火なり、箋に曰、此物、家に人無き

無人則然、詩人下字必有來處、○余按、精工滅王。

月光欲到長門殿、別作深宮一段愁。

劉云、無限情思、○余按、深婉勝王。

胡元瑞曰、太白四句意盡、語中、江寧四句、意在言外、然二詩各有至處、不可執泥一端。

余按、一詩爭勝毫釐、以余言之、前半篇、李不如王、後半篇、王不如李、要之魯衛之政已、李于麟唐詩選收江寧、遺太白、可謂偏矣、不偏不黨於詩學、其庶乎哉。

遊洞庭

李白

賈至

洞庭西望楚江分、水盡南天不見雲、日落

まきは則ち然ゆ、詩人、字を下だす、必、來處有り、○余按するに、精工、王に滅す。

月光到らん、欲す長門殿、別に深宮一段の愁を作す。

劉云ふ、無限の情思、○余按するに深婉、王に勝る。

胡元瑞曰、太白か四句、意、語中に盡く、江寧か四句、意、言外に在り、然とも二詩各至處有り、一端に執泥す可らず。

余按するに、一詩、勝を毫釐に争ふ、余を以て之を言ふに、前半篇、李は王に如かず、後半篇、王は李に如かず、之を要するに魯衛の政のみ、李于麟の唐詩選に江寧を收めて太白を遺す、偏し謂ふ可し、不偏不黨、詩學に於て其れ庶からんか。

洞庭に遊ぶ

李白

賈至

洞庭西に望めば楚江分る、水盡きて南天雲を見ず、日落ちて長

長沙秋色遠、不知何處弔湘君。

唐曰、逐臣相遇、故篇有戀主意、洞庭西望者、懷京師也、楚江分者、山川間之也、如是安所布其衷悃乎、吾其弔湘君而愬之爾、然水光接天、秋色無際、弔之無從、終飲恨而已。

余按、岷江從西來、滙爲太湖、故曰分、寫目前景象、第二句、形容天氣晴朗、湖水廣大、自然佳句、唐牽強理解、可謂謬矣、第三句、感景興懷、日落秋遠、水天渺茫、雖有弔古之懷、亦無從抑寫也、細味不知何處弔湘君句、正是深於弔古之意、又重形容湖之廣大莫測也。

楓岸紛紛落葉多、洞庭秋水晚來波、乘興

沙秋色遠し、知らず何れの處にか湘君を弔はん。

唐曰、逐臣相遇ふ、故に篇に主を戀ふ意有り、洞庭西に望むは京師を懷ふなり、楚江分るは、山川之を間つるなり、是の如くは、安んそ其の衷悃を布く所あらんや、吾其れ湘君を弔ひて之を愬へんのみ、然れども水光天に接し、秋色際無し、之を弔ふに從無し、終に恨を飲まんのみ。

余按するに、岷江西より來り、滙して太湖を爲る、故に分を曰ふ、目前の景象を寫す、第二句、天氣晴朗、湖水廣大を形容す、自然の佳句、唐、牽強理解す、謬を謂ふ可し、第三句、景に感じ懷を興す、日落ち秋遠く、水天渺茫、弔古の懷有り、雖、亦抑寫するに從無きなり、細に、「知らず何れの處にか湘君を弔はん」の句を味へば、正に是れ弔古の意に深し、又重く湖の廣大測る莫きを形容するなり。

楓岸紛々として落葉多し、洞庭の秋水晚來波たつ、興に乗じて

輕舟無近遠、白雲明月弔湘娥。

唐曰、上用楚詞語、布景、下遂有湘娥之弔、遂臣托興之微意也。○劉曰、末句翻李白案。○鍾曰、二語不是翻太白案、白雲明月四字、正爲不知何處弔湘君、下一注脚。○余按、賈詩不爲不佳、而太白詩天然精妙、名世傑作、不可竝論、結句雄渾、全首爲之發彩、自餘三句不及遠矣、又按賈詩起承用楚詞、鍛鍊無痕、風骨自然、轉句亦自高韻、結句超乘而上、亦是名世之作也、但西施在傍、衆嬪覆面耳。

軍城早秋

嚴武

杜甫

輕舟近遠無し、白雲明月湘娥を弔はん。

唐曰、上は楚詞の語を用ひて景を布き、下は遂に湘娥の弔有り、遂臣托興の微意なり。○劉曰、末句李白が案を翻す。○鍾曰、二語是れ太白か案を翻するにあらず、白雲明月の四字、正に「知らず何れの處にか湘君を弔はん」が爲めに一注脚を下すのみ。○余按するに、賈か詩、不佳を爲さず、而して太白か詩、天然精妙、名世の傑作、竝論す可らず、結句雄渾、全首の爲めに彩を發す、自餘三句及はざるこそ遠し、又按するに、賈か詩、起承、楚詞を用ふ、鍛鍊痕無し、風骨自然、轉句亦自ら高韻、結句超乘して上る、亦是れ名世の作なり、但、西施傍に在り、衆嬪面を覆ふのみ。

軍城早秋

嚴武

杜甫

昨夜秋風入漢關、朔雲邊月滿西山、更催  
飛將追驍虜、莫遣沙場匹馬還。

劉曰、氣槩雄壯、武將本色、○唐曰、西塞  
早寒、故秋風始來、雲雪已滿、胡兵每以  
此時入寇、於是遣飛將追擊、且欲殲之  
使無遺騎也。

秋風嫋嫋動高旌、玉帳分弓射虜營、已收  
滴博雲間戍、欲奪蓬婆雪外城。

劉曰、形容勝氣、可入凱歌、○唐曰、秋者  
用刑之始、命將之時也、故分弓以射虜  
營、若果滴博之戍已散、則蓬婆之城且  
將奪之矣、○余按、二詩各臻其妙、嚴極  
雄健之態、杜乃優游不迫、蘊藉典雅、所  
以勝之一等也、且玉帳分弓射虜營、何

昨夜秋風漢關に入る、朔雲邊月西山に滿つ、更に飛將を催して  
驍虜を追ふ、沙場の匹馬をして還らしむるゝこ莫れ。

劉曰、氣概雄壯、武將の本色、○唐曰、西塞早寒、故に秋風始て  
來り、雲雪已に滿つ、胡兵毎に此の時を以て入寇す、是に於て  
飛將を遣し追擊し、且つ之を殲して遺騎無からしめんゝ欲す  
るなり。

秋風嫋々高旌を動かす、玉帳弓を分ちて虜營を射る、已に滴博  
雲間の戍を收めて、蓬婆雪外の城を奪はんゝ欲す。

劉曰、形容勝氣、凱歌に入る可し、○唐曰、秋は刑を用ふるの  
始め、將に命するの時なり、故に弓を分ちて以て虜營を射る、  
若し、果して滴博の戍已に散すれば、則蓬婆の城を且將に之  
を奪はんゝ、○余按するに、二詩各、其の妙に臻る、嚴は  
雄健の態を極め、杜は乃優游不迫、蘊藉典雅、之に勝る一等な  
る所以なり、且つ「玉帳、弓を分ちて虜營を射る」、何等の摸寫

等摸寫、對結蒼古、非小家數可企及者、也、又按嚴詩起結俱妙、鍾伯敬曰、嚴武妙絕、交有奇情、詩有奇趣、想杜老不錯、余謂杜公得嚴唱和、真好對手。

右詩體品若干首、并載古人同時之作、折衷以臆見質之知己云。

ぞ、對結蒼古、小家數の企及す可き者に非るなり、又按するに、嚴か詩は、起結俱に妙。

鍾伯敬曰、嚴武妙絶、交奇情有り、詩に奇趣有り、想ふに杜老錯らず、余謂ふ杜公、嚴か唱和を得たり、真正の好對手。

右詩體品若干首、古人同時の作を並載し、折衷するに臆見を以てし、之を知己に質す云。

2  
丹丘詩話卷中畢



# 丹丘詩話卷下

平安 芥煥 彦 章 著

關元常子恆校

## ○詩評斷

○文心雕龍曰、四言正體、雅潤爲本、五言流調、清麗居宗、華實異用、唯才所安、故平子得其雅、叔度合其潤、茂先凝其精、景陽振其麗、兼善則子建、仲宣、偏美則太冲、公幹、余謂仲宣爲兼善、則不足、公幹爲偏美、則有餘、古詩之美、其唯陳思乎、含王吐劉、集而大成、無以尙焉、若夫宋人沾沾元亮、則亦不足與言詩矣、

## ○詩評斷

○文心雕龍曰、四言は正體、雅潤を本と爲す、五言は流調、清麗宗に居る、華實用を異にす、唯才の安する所、故に平子は其の雅を得、叔度は其の潤を含み、茂先は其の精を凝らし、景陽は其の麗を振ふ、兼善は則子建、仲宣、偏美は則太冲、公幹、余謂ふ仲宣、兼善と爲せば則足らず、公幹、偏美と爲せば則餘り有り、古詩の美、其れ唯、陳思か、王を含み劉を吐き、集めて大成す、以て尙ふるべし無し、夫の宋人が元亮に沾々たるが若きは、則亦與に詩を言ふに足らざるなり。

○劉氏所謂五言流調、清麗居宗、此謂魏晉以後則可也、非所稱兩漢之謂也、余改之曰、五言溫雅、質朴居宗、斯乃吻合耳、六朝崇浮華、劉論不足深咎也。

○後世例謂五言古詩爲選體、嚴儀卿已非之、是也、夫選詩時代不同、體製各異、安得混稱乎、且昭明之選、冗而不精、而後人不得廢之、豈以魏晉以來諸家篇籍、率屬淪亡乎。

○李于鱗選唐詩、不可謂文無害也、嘗試論之、唐無五言古詩、而有其古詩自是一代風格、奚得不取哉、七言歌行、太白間用長語、亦是其變化處、非英雄欺人也、李頎、王維七言律、雄壯流暢、固是綽然名家、然

○劉氏か謂はゆる五言流調、清麗宗に居るは、此れ魏晉以後を謂ふは則可なり、兩漢を稱する所の謂に非るなり、余之れを改めて曰、五言溫雅、質朴宗に居る、斯に乃吻合するのみ、六朝、浮華を崇ぶ、劉が論深く咎むるに足らざるなり。

○後世例して五言古詩を謂て選體と爲す、嚴儀卿已に之を非とす、是なり、夫れ選詩、時代同じからず、體製各異なり、安ぞ混稱するを得んや、且、昭明の選、冗にして精ならず、而して後人之を廢するここを得ず、豈と魏晉以來、諸家の篇籍、率ね淪亡に屬するを以てなるか。

○李于鱗、唐詩を選する、文無害と謂ふ可からざるなり、嘗試に之を論ぜんに、唐に五言古詩無し、而して其の古詩有り、自らはれ一代の風格、奚ぞ取らざるを得んや、七言歌行、太白間、長語を用ふ、亦是れ其變化の處、英雄人を欺くに非るなり、李頎、王維の七言律は、雄壯流暢、固より是れ綽然たる名家、然とも之を

比之子美、則有間矣。七言絶、太白、少伯、乃魯衛之政也。于鱗、左祖青蓮、非公論矣。亦唯人心如面、讀破萬卷、別具一隻眼者、而可始與言詩已矣。

○唐無五言古詩、此固然矣。以余言之、亦小冤焉。唐人之才、無讓魏晉、但調頗駁雜、故不能超乘而上矣。而如子昂、感遇、太白、古風、書懷、子美、羌村、出塞、高常侍紀行、岑、補闕覽勝等、下超宋齊、上迫魏晉、胡元瑞謂之六朝妙語、兩漢餘波、誠不誣也。

○擬古之詩、非難摸剽、惟顧意態、風神如何耳。故學詩至五言古、五言古、至兩漢、即大匠國工、莫不履冰戰戰焉。嗚呼、難矣哉。不襲陳言、獨挈心印、超越六朝、追蹤兩漢、

子美に比すれば、則間有り、七言絶は、太白少伯、乃ち魯衛の政なり、于鱗、青蓮に左祖す、公論に非ず、亦唯、人心は面の如し、萬卷を讀破し、別に一隻眼を具ふる者にして、始めて與に詩を言ふ可きのみ。

○唐に五言古詩無しとは、此れ固より然り、余を以て之を言へは、亦小く冤なり、唐人の才、魏晉に譲ること無し、但、調頗る駁雜、故に超乘して上ること能はざるなり、而して子昂か感遇、太白か古風・書懷、子美か羌村・出塞、高常侍か紀行、岑補闕か覽勝等の如き、下は宋齊を超へ、上は魏晉に迫れり、胡元瑞之を六朝の妙語、兩漢の餘波と謂ふ、誠に誣むざるなり。

○擬古の詩、摸剽し難きに非ず、惟、意態風神如何と顧みるのみ、故に詩を學びて五言古に至り、五言古、兩漢に至りて、即大匠國工も、履冰戰々たらざる莫し、嗚呼、難いかな、陳言を襲はず、獨り心印を挈け、六朝に超越し、兩漢に追蹤す、吾、其の語を

604  
吾聞其語、未見其人。

○七言歌行、比五言畧易下手、胡元瑞曰、主拾遺、賓供奉、左中允、右嘉州、則沈雄秀逸、短什宏章、諸體悉備、至于千言百韻、取法盧駱、什一爲之可也、元瑞論諸體、斟酌衆家、大率此類、嗚呼天實生才、不盡作者、自苦學到此境、真是揚州鶴也哉。

○五言律、盛唐諸家、聲律不諧者多矣、初學不可程式矣、謝茂秦曰、子美居夔州、上句曰、春知催柳別、農事聞人說、別說同韻、王維溫泉上句曰、新豐樹裏行人度、聞說甘泉能獻賦、度賦同韻、此非詩家正法、章碣上句皆用輪音、尤可怪也、此方詩家多犯此法、故特表出之。

聞く、未だ其の人を見ず。

○七言歌行、五言に比するに畧、手を下し易し、胡元瑞曰、拾遺を主とし、供奉を賓とし、中允を左にし、嘉州を右にせば、則ち沈雄秀逸、短什宏章、諸體悉く備はる、千言百韻に至ては、法を盧駱に取り、什一之を爲して可なり、元瑞が諸體を論ずる、衆家を斟酌する、大率此の類なり、嗚呼天實に才を生じて盡くさず、作者自ら苦む、學んで此境に到れば、眞に是れ揚州の鶴ならんかな。

○五言律、盛唐の諸家、聲律諧はざるもの多し、初學は程式に可からず、謝茂秦曰、子美が夔州に居る、上句に曰、「春は知る催柳の別、農事人の説くを聞く」云、別說同韻、王維が溫泉の上句に曰、「新豐樹裏行人度る、聞くならく甘泉能く賦を獻す」と、度賦同韻、此れ詩家の正法に非ず、章碣の上句、皆、輪音を用ふ、尤、怪む可きなり、此の方の詩家、多く此の法を犯す、故に特に之を表出す。

○七言律諸家所難、歷下稱、王維、李頎、顏  
 臻、其妙、子美篇什雖多、慣焉自放矣、或曰、  
 歷下之論、若此、唐人之律體可知也、明人  
 優然爲之、其多者至千篇、少者不下貳百、  
 豈明人之才倍蓰唐人邪、何其多也、余曰、  
 不然、亦唯時使之然也、夫沈宋始唱近體、  
 篇什稀少、盛唐諸公繼興、大暢雅風、而事  
 不專務、時具一體、亂離之間、篇籍易散、故  
 太白之集、僅存數篇、達夫之稿、止留幾首、  
 豈以此少、唐人邪、假使摩詰少伯、達夫、岑  
 參、生於嘉萬之間、則其所成、豈出於邊廷  
 實徐禎卿、吳明卿、徐子與之下乎、學者默  
 識、莫敢議而可也。

○絕句之義、迄無定議、謂裁近體首尾、或

丹丘詩話卷下

○七言律は、諸家の難しとする所、歷下稱す、王維、李頎、顏其の  
 妙に臻る、子美が篇什多し、雖慣焉自放なり、或ひて曰、歷下  
 の論、此くの若し、唐人の律體知る可きなり、明人優然之を爲  
 す、其の多き者も千篇に至り、少き者も貳百に下らず、豈と明人  
 の才、唐人に倍蓰するか、何ぞ其れ多きや、余曰、然らず、亦唯、  
 時、之を然らしむるなり、夫れ沈宋始めて近體を唱へ、篇什稀  
 少、盛唐の諸公繼で興り、大に雅風を學ぶ、而して専ら務めず、  
 時に一體を具ふ、亂離の間、篇籍散じ易し、故に太白の集は僅  
 に數篇を存し、達夫の稿は、止、幾首を留む、豈此を以て唐人を  
 少させんや、假し摩詰、少伯、達夫、岑參をして嘉萬の間に生れ  
 しめば、則其成す所豈に邊廷實、徐禎卿、吳明卿、徐子與の下に  
 出でんや、學者默識して敢て議する、こゝ莫くして可なり。

○絶句の義、迄に定議無し、近體の首尾、或は中二聯を裁を謂

中二聯、恐不足、綴吾友宇士朗謂、絕句者、謂一句一絕、律詩句句聯排、絕句不然、故絕句對律詩之稱耳、此說明白、可據、古人未曾言及。

○古今詩話、惟嚴儀卿滄浪詩話、斷千古公案、儀卿自稱、誠不誣也、其他歐陽公六一詩話、司馬溫公詩話之類、率皆資一時談柄耳、於詩學實沒干涉、初學畧之而可也。

○滄浪詩話之外、畧可取者、陳師道后山詩話、雖其識非上乘、其論時入妙悟、故高廷禮品彙多收之、詩家最不可不讀也。

○后山詩話曰、孟嘉落帽、前世以爲勝絕、杜子美九日詩云、休將短髮還吹帽、笑倩

ふと、恐くは憑るに足らず、吾か友宇士朗謂ふ、絶句とは、一句一絶を謂ふ、律詩は、句句聯排す、絶句は然らず、故に絶句は律詩に對するの稱のみぞ、此の説明白、據る可し、古人未だ曾て言及せず。

○古今の詩話、惟、嚴儀卿が滄浪詩話、千古の公案を斷ず、儀卿自稱、す誠に誣ひざるなり、其他歐陽公の六一詩話、司馬溫公詩話の類、率ね皆一時の談柄に資するのみ、詩學に於て實に干涉なし、初學之を畧して可なり。

○滄浪詩話の外、略、取る可き者は、陳師道の后山詩話、其の識、上乘に非ずと雖、其の論時に妙悟に入る、故に高廷禮の品彙、多く之を收む、詩家最讀まざる可からざるなり。

○后山詩話に曰、孟嘉が落帽、前世以て勝絶と爲す、杜子美が九日の詩に云ふ、短髮を將つて還つて帽を吹くを休めよ、笑つて

傍人爲正冠、其文雅曠達、不減昔人、謂詩非力學可致、正須胸中度世耳、余謂胸中度世亦由力學中得。

○又曰、寧拙母巧、寧粗母弱、寧僻母俗、詩文皆然、魏文帝曰、文以意爲主、以氣爲輔、以詞爲衛、子桓不足以及此、其能有所傳乎、余謂寧拙母巧、寧粗母弱、此是大乘中法語、寧僻母俗、此傍墜魔境、單偈、余易之曰、寧俗母僻、乃始合大道耳、毫釐千里之差、識者自知之。

○許彥周誚杜牧赤壁詩曰、孫氏霸業繫此一戰、社稷存亡、生靈塗炭、都不問、只恐捉了二喬、可見措大不識好惡、余讀之夜餐之頃、不覺噴飯滿盤、因謂假使牧之

傍人を情ふて爲に冠を正さしむべき、其の文雅曠達、昔人に減せず、謂へらく詩は力學して致す可きに非ず、正に須く胸中に世を度すべきのみ、余謂へらく胸中に世を度するも、亦力學の中より得るなり。

○又曰、寧拙なるも巧なること母れ、寧、粗なるも弱なること母れ、寧、僻なるも俗なること母れ、詩文皆然り、魏の文帝曰、文は意を以て主と爲し、氣を以て輔と爲し、詞を以て衛と爲す、子桓以て此に及ぶに足らず、其れ能く傳ふる所有らんや、余謂へらく、寧、拙なるも巧なる母れ、寧、粗なるも弱なる母れとは、此は是れ大乘中の法語、寧、僻なるも俗なる母れとは、此は傍ら魔境に墜つる單偈、余之を易へて曰、寧、俗なるも僻なること母れと、乃始めて大道に合せんのみ、毫釐千里之差、識者自ら之を知らん。

○許彥周、杜牧が赤壁の詩を誚りて曰、孫氏が霸業、此の一戦に繫る、社稷の存亡、生靈の塗炭、都て問はず、只二喬を捉了せんことを恐る、見る可し措大好悪を識らざるを、余之を讀み、夜餐の頃に方り、覺えず噴飯、盤に滿つ、因て謂ふ假し牧之をして

聞之、則必當捧腹絕倒矣。杜結句流暢婉麗、不涉理路、其妙正在阿堵中、措大不識好惡、彥周自言。

○楊用脩曰、崔顥黃鶴樓賦體多、沈佺期獨不見、比興多以畫家法論之、沈詩披麻皴、崔詩大斧劈破也、可謂知言矣、蓋沈詩巧密、建詩開山、崔詩疎宕、古風遺調、崔氣勝韻、沈韻勝氣、二詩實難優劣。

○白樂天詩、離離原上艸、一歲一枯榮、野火燒不盡、春風吹又生、願況深稱之、真佳句也、且藹然其言、溫厚和平、與夫詩爲識者異矣、宜公之長世也。

○韓退之云、齊梁及陳隋、衆作等蟬噪、余謂昌黎砥柱衰運、超然復古、要之立宗之

之を聞かしかめば、則必當に捧腹絶倒すべし、杜が結句流暢婉麗、理路に涉らず、其の妙は正に阿堵の中に在り、措大好惡を識らずこは、彦周自ら言ふなり。

○楊用脩曰、崔顥が黃鶴樓は賦體多し、沈佺期が獨不見は比興多し、畫家の法を以て之を論ずるに、沈が詩は披麻皴、崔が詩は大斧劈破なりと、知言と謂ふ可し、蓋、沈が詩は巧密、律詩の開山、崔が詩は疎宕、古風の遺調、崔は、氣韻に勝つ、沈は韻、氣に勝つ、二詩實に優劣し難し。

○白樂天が詩に、「離々たる原上の艸、一歳一枯榮、野火燒き盡さず、春風吹いて又生す」、願況、深く之を稱す、眞に佳句なり、且つ藹然たる其の言、溫厚和平、夫の詩を識る爲す者、異なり、宜なり公の長世せることや。

○韓退之云ふ、「齊梁及び陳隋、衆作は蟬噪に等し」と、余謂へらく昌黎衰運に砥柱し、超然として古に復す、之を要するに立宗



論不能不爾耳。楊仲弘曰、詩當取材於選、效法於唐、許彥周曰、昌黎此語、吾不敢議、亦不敢從、有味哉。

○司空圖與王駕書評詩曰、國初雅風特盛、沈宋始興之後、傑出江寧、宏思至李杜、極矣、右丞蘇州、趣味澄夏、若清流之貫遠、大曆十數公、抑又其次、元白力勅而氣屏、乃都市豪估耳、劉夢得、楊巨源、亦各有勝會、浪仙無可、劉得仁輩、時得佳致、亦足滌煩、厥後所聞褊淺矣、司空此論、可謂卓識矣、但時屬衰運、調沿時流、亦可惜也。

○楊用脩曰、許渾蓮塘詩、此丁卯集中第一、而選者不知、取他章莊憶昔、羅隱梅花、李郢上裴晉公、皆晚唐絕唱、可與盛唐時

の論、爾らざる能はざるのみ、楊仲弘曰、詩は當に材を選に取り、法を唐に效ふべし、許彥周曰、昌黎か此の語、吾敢て議せず、亦敢て從はず、味ひ有るかな。

○司空圖の王駕に與ふる書に、詩を評して曰、國初雅風特に盛なり、沈宋始めて興るの後、傑出江寧、宏思李杜に至て極る、右丞蘇州、趣味澄夏、清流の遠きを貫ぬるか若し、大曆の十數公、抑も又其の次なり、元白は力勅して氣屏、乃都市の豪估のみ、劉夢得、楊巨源、亦各、勝會有り、浪仙、無可、劉得仁か輩、時に佳致を得、亦煩を滌ふに足る、厥の後は聞く所褊淺なり、司空が此の論、卓識と謂ふ可し、但、時衰運に屬し、調、時流に沿ふ、亦惜む可きなり。

○楊用脩曰、許渾か蓮塘の詩、此れ丁卯集中の第一なり、而して選者取るを知らず、他の章莊の憶昔、羅隱の梅花、李郢の裴晉公に上る、皆晚唐の絶唱、盛唐と稱讃す可し、惟、巨眼の者之を知

藥、惟巨眼者知之、余謂此四詩固鐵中錚錚、要之不及錢劉之調、何論其上、用脩喜爲僻論、豈具正法眼者耶。

○詩不可強解、不可淺解、唯優柔厭厭、久而乃得、此其真味、從來解杜詩者、數十百家、率皆措大穿鑿附會、謬妄居半、何足取哉、陶靖節好讀書、不求甚解、此真善讀書者、余故謂吟詩不求甚解、此真善解詩者。

○兩漢古詩、氣象混沌、無迹可求、而豈枯淡無味之謂哉、梅酸李苦、自然天味、不假製造、各可人口、魏人質勝、其文繼響兩漢、但時露其才、頗出有意、比之兩漢、覺隔一層焉。

○六言、詩人賦詠之餘、扁什稀少、不足論

らんこ、余謂ふ此の四詩、固より鐵中の錚々、之を要するに錢劉の調に及ばず、何ぞ其の上を論ぜんこ、用脩喜で僻論を爲す、豈に正法眼を具ふる者ならんや。

○詩は強解す可からず、淺解す可からず、唯、優柔厭厭、久くして乃ち得、此れ其の真味なり、從來杜詩を解する者、數十百家、率ね皆措大の穿鑿附會、謬妄半に居る、何ぞ取るに足らんや、陶靖節、讀書を好み、甚解を求めず、此れ真に善く書を讀む者なり、余故に謂ふ、詩を吟じて甚解を求めず、此れ真に善く詩を解する者なり。

○兩漢の古詩、氣象混沌、迹の求む可き無し、而も豈に枯淡無味の謂ならんや、梅酸李苦、自然の天味、製造を假らずして、各、人口に可なり、魏人は質、其の文に勝ち、響を兩漢に繼ぐ、但、特に其才を露し、頗有意に出つ、之を兩漢に比すれば、一層を隔つるを覺ゆ。

○六言は、詩人賦詠之餘、篇什稀少、論述するに足らず、唯、王

述、唯王維田園樂、句法變化、典實古雅、最可師法。

○六言律、唐人絕少、品彙中纔收數首、惟韓翃送陳明府赴淮南、典暢雅麗、甚可法也、蓋六言律不難、中間二聯、起結最難、韓起結俱佳、故自濯濯。

○洪容齋隨筆曰、皇甫冉集中所載、張繼奉寄六言詩一首、冉酬之詩序曰、懿孫、予之舊好、祇役武昌、有六言詩見憶、今以七言裁答、蓋拙事者、繁而費、冉之意、以六言難工、故衍爲七言答之、然自又有小江懷靈一上人等三篇、皆清絕可畫、非拙而不能也、予編唐人絕句、得七言七千五百首、五言二千五百首、合爲萬首、而六言不滿

雜の田園樂、句法變化、典實、古雅、最、師法にすべし。

○六言律、唐人絶えて少し、品彙の中纔に數首を收む、惟韓翃の陳明府が淮南に赴くを送る、典暢雅麗、甚だ法に可きなり、蓋、六言律は、中間二聯を難しませず、起結最も難し、韓が起結俱に佳、故に自ら濯々たり。

○洪容齋隨筆に曰、皇甫冉が集中に載する所の、張繼奉寄の六言の詩一首、冉之に酬ゆる詩序に曰、懿孫は予の舊好、武昌に祇役す、六言の詩憶はるゝ有り、今七言を以て裁答す、蓋事に拙なる者は、繁にして費、冉の意六言は工なり難きを以て、故に衍して七言を爲して之に答ふ、然れども自、又、小江に靈一上人等を懷ふ三篇有り、皆清絶畫く可し、拙にして能はざるに非るなり、予唐人の絶句を編し、七言七千五百首、五言二千五百首を得、合せて萬首を爲す、而して六言は四十に満たず、信なるかな

四十、信乎其難也、余謂六言固難、而未若七言之難、故六言、庸工可以藏拙、七言、大匠不可以掩瑕、宜唐人專精七言、欠工六言、有旨哉、

○斐迪、孟城坳詞極古拙、寄慨不淺、劉須溪評云、未爲不佳、與王維相去遠甚、余謂二詩屬詞不同、寓感各異、未易優劣、

○敖子發曰、李太白、越中懷古、韓退之、游曲江、寄白舍人、元微之、劉阮天台、皆以落句轉合、有抑揚、有開闔、此格唐詩中亦多不得、余謂落句轉合最難、青蓮結句、用意入神、而更自淒婉、固是千古絕調、韓元二公、頗背當行、且意盡句中、越之、言外、未可竝論也、

其の難きや余謂へらく六言固に難し、而も未だ七言の難きに若かず、故に六言は、庸工以て拙を藏す可し、七言は、大匠以て瑕を掩ふ可からず、宜なり唐人の精を七言に專にし、工を六言に欠くも、旨有るかな。

○斐迪が孟城坳、詞極めて古拙、寄慨淺からず、劉須溪が評に云ふ、未だ不佳と爲さざるも、王維と相去るこゝ遠き甚しと、余謂へらく、二詩屬詞同じからず、寓感各異り、未だ優劣し易らず。

○敖子發曰、李太白か越中懷古、韓退之が曲江に遊び白舍人に寄す、元微之が劉阮天台、皆落句を以て轉合す、抑揚有り、開闔有り、此の格、唐詩の中、亦多く得ず、余謂へらく、落句轉合最難し、青蓮が結句、意を用ふるこゝ神に入る、而して更に自ら淒婉、固に是れ千古の絶調、韓元二公、頗る當行に背く、且つ意、句中に盡き、越、言外に乏し、未だ竝論す可からざるなり。

○何仲默曰、右丞他詩甚長、獨古作不遠、蓋自漢魏後、而風雅渾厚之氣、空有存者、右丞以清婉峭拔之才、一起而綽然、宜乎就速而未之深造也、余謂右丞古調、固不能越唐調、而清空間遠、比之蘇州、更覺自在、吾願學之。

○古人論同時之毀譽、多過其實、未可即信也、李觀論孟郊詩曰、高處在古無上、下顧二謝云、韓文公送序曰、孟郊東野始以其詩鳴、其高出魏晉、不懈而及於古、夫郊詩清瘦古質、固是作家、然謂之無上、或稱出魏晉、亦甚過矣、又劉長卿嘗謂、今人稱前有沈宋、李杜、後有錢郎、劉李、李嘉祐、朗士元、何得與余竝驅、又楊炯謂、吾愧在盧

○何仲默曰、右丞か他詩甚長す、獨古作は遠はず、蓋し漢魏より後、風雅渾厚の氣空く存する者有り、右丞、清婉峭拔の才を以て、一起して綽然たり、宜なるかな速に就きて未だ之に深く造らざるなり、余謂へらく右丞の古調、固より唐調に越ゆる能はず、而して清空間遠、之を蘇州に比するに、更に自在を覺ゆ、吾願くば之を學ばん。

○古人、同時の毀譽を論する、多くは其の實に過ぐ、未だ即ち信ず可からざるなり、李觀、孟郊の詩を論じて曰、高處古に在て上無し、下、二謝を顧みるに云ふ、韓文公の送序に曰、孟郊東野始めて其の詩を以てを鳴る、其の高き魏晉に出づ、懈らざれば而ち古に及ばんと、夫れ郊か詩、清瘦古質、固に是れ作家なり、然ども之を無上と謂ひ、或は魏晉に出づと稱す、亦甚だ過ぎたり、又劉長卿嘗て謂ふ、今人稱す、前に沈宋李杜有り、後に錢郎劉李有り、李嘉祐朗士元、何ぞ余と竝び驅するを得んと、又楊炯

前、恥居王後之類、亦皆不免、軒輊焉、具眼者自知之。

○張子容送內兄李錄事歸故里云、十年多難與君同、幾處移家逐轉蓬、白首相逢征戰後、青春已過亂離中、行人杳杳看西日、歸馬蕭蕭向北風、漢水楚雲千萬里、天涯此別恨無窮、調雖稍弱、流暢清婉、亦佳作也、諸家之選遺之、大抵三唐詩選或失之寬、或失之嚴、讀者無眩多岐、公爲折衷、則庶幾不負作者。

○韋蘇州詩、以古淡矯俗、僧皎然嘗以數解爲贊、韋心疑之、明日又錄舊製以見、始被領略曰、人各有長、蓋自天分、子而爲我失、故步矣、但以所諧自名可也、皎然乃服、

謂ふ、吾は盧か前に在るを愧ぢ、王か後に居るを恥づるの類、亦皆軒輊を免れず、具眼の者自ら之を知らん。

○張子容、内兄李錄事が故里に歸るを送るに云ふ、「十年多難君さ同じ、幾處か家を移して轉蓬を逐ふ、白首相逢ふ征戰の後、青春已に過ぐ亂離の中、行人杳々西日を看る、歸馬蕭々北風に向ふ、漢水楚雲千萬里、天涯此の別れ恨み窮り無し」と、調稍、弱しと雖、流暢清婉、亦佳作なり、諸家の選、之を遺せり、大抵三唐詩選、或は之を寬に失し、或は之を嚴に失す、讀者多岐に眩する無く、公に折衷を爲さば、則庶幾くば作者に負かさらん。

○韋蘇州の詩、古淡を以て俗を矯む、僧皎然嘗て數解を以て贊と爲す、韋、心に之を疑ふ、明日又舊製を録して以て見す、始めて領略せらる、曰、人各長有り、蓋、自ら天分なり、子にして我を爲さば故歩を失はん、但、所諧を以て自ら名けて可なりと、皎

余謂此論有益於詩學也。蓋才質異途，神用或別，子美不能爲太白之飄逸，太白不能爲子美之沈鬱，各學其性所近，亦詩道捷徑也。

○杜工部歌行，縱橫變化，無容擬議，但晚年諸作，真率不采，似不成章者，亦是大家常態，學者當去其牝牡，效其神駿矣。于鱗稱七言歌行，惟子美不失初唐氣格，縱橫有之，亦唯謂其合作耳。

○劉貢父曰：詞人以也字作夜音，杜云青袍也，自公白公云也，向慈恩寺裡游，不可如字讀也。余謂大抵唐音與今音不同，後世字書亦多掛漏，熟唐詩者自知之。

○又曰：歐陽永叔曰：知梅聖俞詩者莫如

然乃服。余謂へらく、此の論、詩學に益有り、蓋、才質途を異にし、神用或は別なり、子美は太白の飄逸を爲す能はず、太白は子美の沈鬱を爲す能はず、各、其の性の近き所を學ぶは、亦詩道の捷徑なり。

○杜工部か歌行、縱橫變化、擬議を容るること無し、但晩年の諸作、真率にして采あらず、章を成さざる者に似たり、亦是れ大家の常態、學者當に其の牝牡を去りて、其の神駿に效ふべし、于鱗稱す、七言歌行、惟、子美のみ、初唐の氣格を失はず、縱橫之れ有り、亦唯、其の合作を謂ふのみ。

○劉貢父曰、詞人、也の字を以て夜の音と作す、杜云ふ、青袍也、公よりす、白公云ふ、也、た慈恩寺裡に向つて遊ぶ、字の如く讀む可からざるなり、余謂へらく、大抵唐音と今音と同じからず、後世の字書、亦掛漏多し、唐詩に熟する者自ら之を知らん。

○又曰、歐陽永叔曰、梅聖俞か詩を知る者は某に如くは莫し、然

某然聖俞平生所自負者、皆某所不好、聖俞所卑下者、皆某所稱賞、知心賞音之難如此、其評古人之詩得無似之乎、余嘗投舊稿於一友人、索其賞鑒、友人素知詩者、褒貶最多、而余所得意、他不加賞、余所厭棄、彼甚稱揚、斯知賞音之難、古今無二致也。

○宋名家王荆公、歐陽公、蘇東坡、黃山谷、陳簡齋、陸放翁之類、格調氣韻、各自不同、比之唐人、其隔一大劫、何者、其才學識見、爲之崇也、夫文關氣運、固也、宋雖不能混一字內、太宗仁宗之治、儼美於漢唐之盛矣、歐蘇諸公之文、竝轍於韓柳之古、豈氣運之謂哉、亦唯學不得其方也。

六〇  
 とも聖俞平生自負する所の者は、皆某の好まざる所、聖俞が卑下する所の者は、皆某の稱賞する所と、知心賞音の難き此の如し、其の古人の詩を評する、之に似たる無きを得んや、余嘗て舊稿を一友人に投じ、其の賞鑒を索む、友人素より詩を知る者、褒貶最多し、而して余の得意とする所、他賞を加へず、余の厭棄する所、彼、甚稱揚す、斯に知る賞音の難き、古今一致無きことを。

○宋の名家王荆公・歐陽公・蘇東坡・黃山谷・陳簡齋・陸放翁の類、格調氣韻、各自ら同じからず、之を唐人に比するに、一大劫を隔つ、何となれば其の才學識見、之れか崇を爲すなり、夫れ文は氣運に關する、固よりなり、宋字内を混一する能はず、雖、太宗・仁宗の治、美を漢唐の盛に儼ぶ、歐蘇諸公の文、轍を韓柳の古に並ぶ、豈、氣運之れ謂はんや、亦、唯、學其の方を得ざればなり。



○辛文房唐才子傳品騰頗有精理其論詩題曰嘗讀選中沈謝諸公詩有題新安江水至清淺深見底貽京邑游好及石門新營所住四面高山回溪石瀨茂林脩竹及田南樹園激流植榿齋中讀書南樓中望所運客晚登三山還望京邑等數端皆奇崛精當冠絕古今無曾發其軀奧者逮盛唐沈宋獨孤及李嘉祐韋應物等諸才子集中往往各有數題片言不苟皆不減其風度此則無傳之妙遠元和以下佳題尙罕況於詩乎立題乃詩家切要貴在卓絕清新言簡而意足句之所到題必盡之中無失節外無餘語此可與智者商榷云余謂此論精當可以爲立題程法然唐人

○辛文房の唐才子傳、品騰頗精理有り、其詩題を論じて曰、嘗て選中沈謝諸公の詩を讀むに、新安江水至清、淺深底を見る、京邑の游好に貽るる題する有り、及び石門新營の所住、四面高山回溪、石瀨茂林脩竹あり、及び田南の樹園に、流を激し榿を植う、齋中讀書、南樓中運つ所の客を望む、晚に三山に登り、遠た京邑を望む等の數端、皆奇崛精當、古今に冠絶す、曾て其の軀奧を發する者無し、盛唐に逮び、沈・宋・獨孤及・李嘉祐・韋應物等諸才子の集中、往々各、數題有り、片言苟もせず、皆其の風度に減せず、此れ則無傳の妙、元和以下に遠んで、佳題尙罕れなり、況や詩に於てをや、立題は乃ち詩家の切要、貴きは卓絶清新に在り、言簡にして意足り、句の到る所、題必之れを盡す、中に失節無く、外に餘語無し、此れ智者と商榷す可しと云ふ、余謂へらく、此の論精當、以て立題の程法を爲すべし、然ども唐人の命題、必しも善を盡さず、未だ此の言に稱はず、但、明の李獻吉、

命題不必盡善、未稱此言、但明李獻吉何仲默、李于鱗、王元美、數公、手自與復、千古盛運、洗滌後世陋態、簡潔精賞、不煩繁冗、乃始足稱此言矣、具眼者自知之云。

○明詩繼唐、只伯仲之間而已、然流派最多、故易眩人、有初盛有中晚、而又非若唐詩界限、塹然大抵李本寧、胡元瑞之儔、已入中唐樊圃、袁中郎、鍾伯敬、譚元春之徒、深墜晚季、彊吟、甚者傳薪宋人、詩道之衰甚矣、陳臥子、李舒章之徒、唱義關之、而力微任大、不能挽回、豈不惜乎。

○明詩之選數十家、互有長短、唯陳臥子、選頗中肯綮、而率取平淡流暢、未滿人意、余欲裁定補刪、有志不果。

何仲默、李于鱗、王元美、數公、手自千古之盛運、興復之、後世之陋態、洗滌、簡潔精賞、繁冗、煩、乃始足稱此言矣、具眼者自知之云。

○明詩、唐に繼ぐ、只伯仲の間のみ、然れども流派最多し、故に人を眩し易し、初盛あり、中晚あり、而して又唐詩の界限、塹然たるか若きに非ず、大抵李本寧、胡元瑞の儔、已に中唐の樊圃に入る、袁中郎、鍾伯敬、譚元春の徒、深く晚季の彊吟に墜つ、甚しきは宋人に傳薪す、詩道の衰ふる甚し、陳臥子、李舒章の徒、義を唱へて之を關く、而も力微に任大にして、挽回する能はず、豈惜しからずや。

○明詩の選數十家、互に長短有り、唯、陳臥子の選、頗る肯綮に中る、而して率ね平淡流暢を取る、未だ人意に滿たず、余裁定補刪せん、欲す、志有りて果さず。

○胡元瑞評論唐詩的白精確、無以加焉、但於明人頗阿其所好、與奪過實、後學慎簡擇之可也。

○胡元瑞每抑濟南而揚瑯琊、陳臥子偏排兗州而專推滄溟、要之偏重一隅、非論篤也、余謂于鱗不如元美之博大、元美不如于鱗之高華。

○李舒章曰、元美諸體似不甚長、惟七言律之妙、華動富溢、掩映時輩、不愧宗工、夫諛瑯琊以諸體不甚長、宛哉瑯琊而不長、則長者幾希。

○兗州詠物六十首、體格卑卑、中晚色相、于鱗華山四首、整練沈渾、千秋絕調、而元瑞謂于鱗四首之內、軌轍已窳、元美百篇

○胡元瑞、唐詩を評論する、的白精確、以て加ふる無し、但、明人に於て頗其の好む所に阿る、與奪實に過ぐ、後學慎んで之を簡擇して可なり。

○胡元瑞、毎に濟南を抑へて瑯琊を揚ぐ、陳臥子偏に兗州を排して専ら滄溟を推す、之を要するに、一隅に偏重す、論篤に非るなり、余謂へらく、于鱗は元美の博大に如かず、元美は于鱗の高華に如かず。

○李舒章曰、元美、諸體、甚長ぜざるに似たり、惟、七言律の妙、華動富溢、時輩に掩映し、宗工に愧ぢず、夫れ瑯琊を諛るに諸體甚長ぜざるを以てす、宛なるかな、瑯琊にして而して長ぜざれば、則長者幾希。オケヒ

○兗州の詠物六十首、體格卑々、中晚の色相、于鱗の華山四首、整練沈渾、千秋の絶調、而るに元瑞謂ふ、于鱗四首の内、軌轍已に窳す、元美百篇の外、變幻未だ窮せず、宛なるかな。

之外變幻未窮寃哉。

○起句之難有二、壯偉者易粗豪、雅淡者易卑弱、名流哲匠、自古難之、惟弇州諸起句、鎔天然于百鍊、操獨得于千鈞、千秋絕技、殆難得而可學也、今畧摘之、左方、初學法、效之、其壯偉典麗者、赤日浴滄海、青天橫岱宗、西來天地坼、無恙大行城、洞庭八百里、春波正渺茫、玉鏡中天挂、金波大地流、十萬嫖姚騎、縱橫大漠旁、其雅淡韻度者、豈必在丘壑、居然無俗塵、洗卻侯家態、胡牀僅薛羅、莫問除書意、風塵彼一時、不辭盃酒醉、山水盡君操。

○老杜多用天地乾坤日月風雨等字、句句有法、于鱗元美最長、善學變化入神、今

○起句の難き二有り、壯偉なる者は粗豪なり易く、雅淡なる者は卑弱なり易し、名流哲匠、古より之を難たんず、惟、弇州が諸起句天然を百鍊に鎔し、獨得を千鈞に操す、千秋の絕技、殆んど得て學ぶ可き難し、今略、之を左方に摘し、初學をして之を法效せしむ、其壯偉典麗なる者は、「赤日滄海に浴し、青天岱宗に横ふ」、「西來天地坼け、無恙なり大行城」、「洞庭八百里、春波正に渺茫」、「玉鏡中天に挂り、金波大地に流る」、「十萬嫖姚の騎、縱横す大漠の旁」、其の雅淡にして韻度ある者は、「豈必丘壑に在らんや、居然、俗塵無し」、「侯家の態を洗卻し、胡牀僅に薛羅」、「除書の意を問ふこと莫れ、風塵彼も一時」、「盃酒の醉を辭せず、山水君が操を盡す」。

○老杜多く天地乾坤日月風雨等の字を用ふ、句句法あり、于鱗元美、最、善學に長ず、變化神に入る、今時の人、漫用法無し、便

時之人漫用無法、便是做響、不堪其醜、

○弁州兄弟最推明卿、余謂明卿沈著流暢、間入中唐、惟醇乎醇者、止濟南而已矣。

○李獻吉七言絕句、擬少陵者甚多、質朴古拙、各自逼真、亦一種風調、宗轅文誚、不成章、不亦冤乎。

○元美國朝詩評、鑒裁精微、譬喻典麗、今姑舉其數家、曰、何仲默如朝霞點水、芙蓉試風、又如西施、毛嬙、無論才藝、卻扇一顧、粉黛無色、李獻吉如金鷄、璧天、神龍戲海、又如韓信用兵、衆寡如意、排蕩莫測、李于鱗如峨眉積雪、閩風蒸霞、高華氣色、罕見其比、又如大商船、明珠異寶、貴堪敵國、下者木難火齊、余謂王元美如屈注天潢、倒

ち是れ響に倣ふて其の醜に堪へず。

○弁州兄弟、最、明卿を推す、余謂ふ、明卿は沈著流暢、間、中唐に入る、惟、醇乎として醇なる者は、止、濟南のみ。

○李獻吉の七言絶句、少陵に擬する者甚多し、質朴古拙、各自真に逼る、亦一種の風調なり、宗轅文、章を成さざるを諷る、亦冤ならずや。

○元美の國朝詩評、鑒裁精微、譬喻典麗、今姑く其の數家を舉ぐ、曰、何仲默は朝霞の水に點じ芙蓉の風に試むが如し、又、西施、毛嬙、才藝を論する無く、扇を却けて一顧すれば、粉黛、色無きが如し、李獻吉は金鷄、天を擊き、神龍、海に戲るが如く、又韓信、兵を用ひ、衆寡意の如く、排蕩測る莫きが如し、李于鱗は峨眉の積雪、閩風の蒸霞、高華の氣色、其の比を見るに罕なるか如く、又大商船、明珠異寶、貴きは國に敵するに堪へ、下なる者は、木難火齊なるが如し、余謂ふ、王元美は天潢を屈注し、清海に

連滄海、變眩百怪、終歸雄渾、又如百寶流蘇、千絲織網、綺密瓊妍、奪人心目。

○吾邦物茂卿先生曰、于鱗於盛唐諸家外、別構高華一色、而終不離盛唐細抵、其集中一篇一什、亦皆粹然、不外斯色、所以爲不可及也、元美一身具四唐、隨年紀以相升降、可謂奇事矣、余謂李王二子、得物子賞音、吐氣泉下矣。

○王敬美曰、學于鱗不如學老杜、學老杜尙不如盛唐、何者老杜結構自爲一家言、盛唐散漫無宗、人各以意象聲響得之、政如韓柳之文、何有不從左史來者、彼學成而爲柳爲韓、吾卻又從韓柳學、便落一塵矣、輕薄子弟、遠笑韓柳非古、與夫一字一

倒連し、變眩百怪、終に雄渾に歸するか如く、又百寶の流蘇、千絲の織網、綺密瓊妍、人の心目を奪ぶか如し。

○吾が邦物茂卿先生曰、于鱗は盛唐諸家の外に於て、別に高華の一色を構ふ、而して終に盛唐を離れず、細に其の集中を眺るに一篇一什亦皆粹然、斯の色に外ならず、及ぶ可らず、爲す所になり、元美一身、四唐を具ふ、年紀に隨て以て相升降す、奇事を謂ふ可し、余謂ふ、李王二子、物子の賞音を得て、氣を泉下に吐けり。

○王敬美曰、于鱗を學ぶは老杜を學ぶに如かず、老杜を學ぶは尙盛唐に如かず、何となれば、老杜が結構自ら一家言を爲す、盛唐は散漫無宗、人各意象聲響を以て之を得、政に韓柳の文の如し、何ぞ左史より來らざる者有らん、彼れ學び成して、柳を爲り、韓を爲る、吾卻て又韓柳に従て學べば、便ち落んこゝ一塵なり、輕薄の子弟、遠に韓柳の古に非るを笑ふ、夫の一字一語、必、一家に步趨する者、皆非なり、余謂へらく、旨いかな斯の

語、必步趨二家者、皆非也。余謂、旨哉斯言也。近物子首唱明詩、海內嚮風、夫人誦法于鱗、而爭事剽竊、神韻乃乖、青山萬里、動輒盈篇、紛紛刻鷺、至使人厭、豈謂之善學邪。余常誨學者曰、善學于鱗者、不肖于鱗、聽者莫不駭然、或疑或惑、而余自以爲知言、假使王敬美聽之、則必欣然莫逆耳。

右詩評若干條、亦唯爲蒙士啓一二爾、讀者勿笑其鹵莽云。

## 丹丘詩話卷下 畢

丹丘詩話卷下

言や、近ごろ物子、明詩を首唱し、海内風に嚮ふ、夫人于鱗に誦法す、而して争ふて剽竊を事とし、神韻乃乖く、青山萬里、動もすれば輒ち、篇に盈つ、紛々刻鷺、人をして厭はしむるに至る、豈に之を善く學ぶと謂はんや、余常に學者に誨えて曰、善く于鱗を學ぶ者は于鱗に肖す、聽く者駭然として、或は疑ひ或は惑はざる莫し、而して余自ら以て知言と爲す、假し王敬美をして之を聽かしめば、則必欣然として莫逆ならんのみ。

右詩評若干條、亦唯、蒙士の爲に一二を啓するのみ、讀者其の鹵莽を笑ふこと勿れ云ふ。

## 丹丘詩話跋

古今詩話何限也，其拙於自運而口唯善言之者，嚴高二家是已，其巧於自運而口亦善言之者，王元美其人也。然彼善知者，口不能言，詩曰：維其有之，是以似之。故弇州卮言，丹丘詩話猶善言其似者也。何言其不能言者哉。

寬延庚午冬十一月

友人 林 義 卿 撰





大正九年四月廿八日印刷  
大正九年五月一日發行

日本詩話叢書卷二

非賣品

編輯者 池田四郎次郎

東京市神田區小川町一番地

立田義元

東京市麹町區有樂町二丁目一番地

吉原良三

右同所

印刷所 報文社



發行所

東京市神田區  
小川町一番地

文會堂書店

電話神田三二一六番  
張替東京三五一三番